

『ポリクラテイクス』という書物

——ソールズベリーのジョンの政治思想研究序説

- I はじめに——『ポリクラテイクス』の文体の問題
- II 十二世紀精神の一典型としての『ポリクラテイクス』
- III ヘンリ二世不興事件（1156—1157年）——『ポリクラテイクス』成立の一誘因
- IV ボエティウス『哲学の慰め』とジョン——『ポリクラテイクス』の内面的動機
- V 『ポリクラテイクス』の主題と構成
- VI 範例集としての『ポリクラテイクス』とハ君主の鑑への伝統
- VII むすびにかえて——ジョン政治思想理解への基本視角

柴 田 平 三 郎

貴兄がトゥールーズの包囲攻撃に忙殺されておいでの間、「文学なき生活は生ける人間の死であり埋葬である」という考えに思いを致しながら、私はこの作品に着手し、宮廷生活の愚

行からしばし我が身を解放したのであります。

『ポリクラティクス』「プロローグ」

I はじめに——『ポリクラティクス』の文体の問題

アウグスティヌス以後に書かれた中世における最初の広範な政治理論書と言われる『ポリクラティクス』は一体、いかなる書物なのか。

この名のみ有名で、その実よく読まれてはいないジョンの主著を解読して、そこから彼の政治思想を抽出しようと企てることは果たして簡単な作業なのだろうか。『ポリクラティクス』研究の草分け的な存在であるR・L・プールはかつてこの書を「十二世紀中葉の教養思潮の百科全書」(一八八四年)と形容したが、この評価は現在においても基本的には変わっていない。むしろ研究が進捗するにつれて、その複雑な相がますます表面に浮かび上がってきた感がつよい。例えば、現今の最も流通している欧米の政治思想事典(一九八七年)では、それは「政治理論の多面的な作品」であり、「統治のマニユアル、君主のための鑑、モラリストの宮廷生活批判、教訓的哲学論文、文芸の百科事典」と表現されている。

今日、私たちがこの書物に取り組もうとするとき、最初に感じるのそれはそれが全八巻全一六六章という文字通り浩瀚な作品⁽³⁾(*magnum opus*)だという事実からくる種の圧迫感を別にしても、そこに過剰なまでに繰り返される古典作家や聖書、教父からの引用句の羅列である。しかもプールがつとに指摘しているように、この書には無数の脱線、例証、懐旧談がちりばめられており、体系的な構成がとられてはいない⁽⁵⁾。その意味では、けっして読み易い書物とは言えないことも確かである。一例を挙げてみよう。

「すべての追従が恥ずべきことであるとしても、個人の、あるいは身分の權威を使って悪徳を勧めることにもまして有害なことがあるだろうか。確かに、哲学者たちは『すべてのひとたちによってか、あるいは大多数のひとたちによってか、あるいは知者〔学者〕たちによって〔そうだと〕思われていることどもが、通念である』（アリストテレス『トピカ』II）と呼んでいる。それゆえプラトンやソクラテスがあることを告知のために、アリストテレスが精神のつよさのために、キケロが雄弁のために、ピタゴラスが数学への関心のために、ホラティウスが作詞法のために、オウイディウスが詩歌のために薦めるとしたら（オウイディウス『悲歌』IV, 25—26）、それを信じない人は一体、なにゆえにそうなのだろうか。実際、悪徳への誘因はより早く、より効果的に個人の心のなかに忍び込むのである。

それらが偉人たちの名前を使って支持をとりつけるときには（ユベナル『サトゥルナリア』xv, 32—33）にもかかわらず、自分の能力を十分にもっている精神はこんなことによってそのかれはしない。なぜなら『人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るだろうか。』（コリントの信徒への手紙 I: iii）したがって、現代の哲学者や偉人たちよりも賢い、ウエルギリウスのなかの優秀な羊飼いはこう言う。

羊飼いたちは私を吟遊詩人とも呼ぶ、しかし彼らのことを私は信用しない。（ウエルギリウス『詩選』ix, 33—34）⁽⁹⁾

これは宮廷社会に蔓延る「追従」という悪徳を告発するある章の一節であるが、こういう言廻しを知識の徒なひからかして嫌みなスノビズムの文章表現と受け取るか、豊かな教養の期せずしての横溢と見なすか、即断は慎みたい。だが、ジョンの文章作法に我慢のならないものを感じる学者も少なからずいて、そこに痛烈な批判が浴びせられることがあるのもまた事実である。例えば、その代表的な一人でイギリスの著名な中世史家 R・W・サザーンは

皮肉を込めて、次のように述べている。

「古典を博搜し、自分の書物の各頁ごとに半ダースもの著者からの引用を積み上げていながら、出典については極端に無関心なソールズベリのジョンのごとき著名なヒューマニストを見ると、われわれとしては、この偉大な人物がいったい、古典文学に対してどのような感性をもっていたのか、問いたださざるをえない。実際、それは、ペトラルカのような感性ではなかった。」⁽⁷⁾

サザーンのこの批判はジョンの「人文主義」の質についてのそれをも含んでいるが、この問題に関しては別の機会に取り上げたので⁽⁸⁾、ここでは繰り返すつもりはない。それよりも確認しておきたいのは、これも既に別稿で触れておいたことであるが、ジョンは古典愛好と文法重視を特色とするシャルトル学派の自由学芸教育を学び、それを自己の人格形成の中心的な柱にした人間だったということである。シャルトルの司教座聖堂学校では古典や聖書、教父の著作が基本教材にされ、そこに表現された「言葉の組み合わせや言い回しの美しさ」⁽⁹⁾が徹底的に教えられたのである。そういうシャルトル学派の学問的薰陶を多感な青春時代に受けたジョンが文章表現の問題に無神経であつたはずはない。そう考えると、サザーンの批判はむしろジョンの文体に、というよりも古典作家を引用するその引用の仕方に向けられたものと言えるだろう。だが、その点においても、サザーンの評価はジョンの本質をいささか見落としているくらいがある。というのも、古典の引用はジョンにとって、文章作成上のたんなる飾りというようなものでは到底なかったからだ。例えば、ハスキンスズはこう語っている。

「ジョンは、彼が最大のラテン作家とみなしていたキケロに特に心酔していた。だから彼は、哲学や人間性に対するキケロの態度とも言うべきものをもち続けていた。彼の極めて純粹で柔軟な文体は、キケロの影響を強く受けていたことを示している。また、彼の著作の多様さ——書簡、歴史、詩、人生や学問や国家についての哲学的省察

——は、キケロ風の多面性をもっている。⁽¹¹⁾」

余計なことを言うようだが、キケロは言語表現の問題に心血を注いだ思想家である。そのキケロへのジョンの傾倒をハスキンズは指摘したうえで、さらに次のように続けている。

「彼（ジョン）は『特に、詩人たち、歴史家たち、弁論家たち、数学者たちの作品がなければ学問ある者とはなれないのだから、これらの人々の作品を読まなければならないこと』を誰が疑えようか、と問い、『なぜならば、これらの著作家たちを知らない者は、たとい文字を知っていても文盲と呼ばれなければならないからである。……しかし本を沢山読んだからといってそれで哲学者となるわけではない』。知恵は真理からのみもたらされるからである、と述べている。⁽¹²⁾」

ここで引用されているジョンの言葉はみな『ポリクラティクス』(III.6)のなかで語られていることであるが、ハスキンズの言いたいことは明白である。ジョンにとって、古典作家は言うにおよばず、聖書や教父の言葉を多用することはけっして徒な権威へのおもねりではなかった。むしろそれは自らの主張するところを独善ではない、連続とつづく人類の知的遺産の継承の上でのことと認識させようとする明快な意図に基づいての戦略だったのである。

さて、このように見てくると、ジョン研究のなかでも、その文体に触れて次のように語っているホイジンガの言葉はまことに印象的である。

「彼（ジョン）の文体と後代の人文主義者のそれとを比べて見れば、十二世紀の私たちの代表に軍配が上がるでしょう。そこには、きどった言廻しや、あるいは長つたらしい学識ばった文章はなく、誇張もされていません。簡潔で明確です。短い章句、単純明解な用語、生き生きと力強く、人をひきつけてはなさない文体、それは荘重で、しかも明るくユーモアに富んでいます。彼は誇張を憎みました。⁽¹³⁾」

このように、ホイジンガはジョンの文体に最大級の賛辞を送っている。よく知られているように、ホイジンガはジョンを知性の面でのアベラル（アベラルドゥス）、美学の領域でのリールのアラヌスと並んで、倫理の面での「十二世紀精神の最も著名な体現者」と位置づけ、「前ゴシック」の一つの精神類型として把握していた。彼のジョン論の特徴はしたがって、個々の作品のなかに表明された思想の成果の細かい分析を通してよりは、むしろジョンの生きた時代の知的雰囲気や、その思想を背後から支える精神のあり方に焦点を合わせてジョンの本質に迫ろうとするところにある。それをホイジンガは「ジョンを理解するためには、彼の学説と知識の背後にある彼の魂と心情を見出すことです。」⁽¹⁴⁾と説明している。その彼がジョンの文体の特質について述べているだけに、傾聴に値するものがあると言えよう。そればかりではない。注目すべきことに、ホイジンガの見方に寄り添いながら、『ポリクラテイクス』の文体を追いかけると、実はジョンの政治思想理解への道が幾分か拓かれていくことに私たちは気づかされることになる。ホイジンガの見解をさらに見てみよう。彼は『ポリクラテイクス』の文体をエラスムスの政治論と対比して、こう語っている。

「まるで話し言葉のような彼の文体には、ちょうどエラスムスの政治論かと思わせる所があります。また古代の人物や引用文をそえる書き方、理想主義的批判精神、自由への愛をひめた純粋な人間精神の中にもエラスムスに似た所があります。しかし、教会に奉仕した実活動家だった一二世紀の著者の方が、三〇〇年のちの大人文主義者よりも遥かに積極的で、遥かに現実的な政治家でした。ただエラスムスと同じく、彼の思想は法律的というより社会的に向いていました。彼は当時の政治生活の悪弊を強く嘆いています。中でも、彼の国の法や習慣を、まるでそれと同じ数のおとし穴やわなについて書くような調子で書いています。例えば、狩猟権は人間性の尊厳を犯すものだと言うのです。」⁽¹⁵⁾

ここには重要な指摘が含まれている。のちにも触れるつもりだが、ジョンは生涯をヨーロッパ各地への遍歴の旅に費やし、ついに定職につくことのなかった「人文主義の王者」エラスムスとはちがって、十二年間にわたる青春の知的修業時代を卒業して公人の生活に入ってからには、もちろん表舞台ではなく、舞台裏からではあったが、終始、政治と宗教、国家と教会をめぐるきわどく、あざとい人間関係のなかで教会の優秀な行政官として懸命に活動していた。したがって、その彼の政治論書『ポリクラティクス』が古典作家や聖書、教父の言葉の過剰な引用を満載した、一見高踏的で、ときに自己滔晦の気分さえなきにもあらずの書物に見えたとしても、そこに彼の内なる激しい主張を読みとれないはずはない。ホイジンガの言葉を再度用いれば、「彼の学説と知識の背後にある彼の魂と心情を見出すこと」、このことが『ポリクラティクス』の解説においてなによりもまず必要とされる態度であろう。ジョンの政治思想の核心部分が私たちの眼前に姿を現すのは、それができ得て後のことにちがいない。

Ⅱ 十二世紀精神の一典型としての『ポリクラティクス』

『ポリクラティクス』をはじめて繙く読者が一樣に感じるのは、古代の諸権威の引用の多さばかりではない。そのことと連動していることだが、読者はそこに実に多くの教訓的な逸話や範例 (*exempla*) が登場することにも眼を奪われる。実は、この範例の多用ということも彼の文体の著しい特徴を形成している点は早くから研究者の間で指摘されてきたことである。例えば、「この書には無数の脱線、例証、懐旧談がちりばめられている」とプールが逸早く語っていたのを紹介したが、H・リーベシュッツはこの点にとくに注目し、「我々は十二世紀のソールズベリジョンの文体の特徴になった、古典と聖書の事例の対応関係に基づいて叙述を構成するという方法が、カロリン

グ朝の教育改革後に初めて発展したものであるのを見ることができ(16)と述べている。この問題は『ポリクラティクス』の思想の方法と主題そのものに係わるので、節を改めて取り上げることにはしたい。ここでは、この書物にはじめて接するとき人が例外なく感じるにちがいない印象、つまりそこでの主題や関心事がまことに多様性に満ちみちているがゆえに、一見するところはなほだ読みにくい作品だと感じるその感覚をまず確認しておこう。そのことは『ポリクラティクス』の解読を阻止する致命的な障壁なのだろうか。

ウェッブの画期的な校訂注釈書(17)(一九〇九年)が公刊されて以来、『ポリクラティクス』の現代語訳はいくつかなされているが、例えば最も流通力の高い英訳版について言えば、現在、ディキンソン(18)(一九二七年)、パイク(19)(一九三七年)、マークランド(20)(一九七九年)、そしてニーダーマン(21)(一九九〇年)による四冊の訳書が出版されている。この四冊はいずれも抄訳であって、全訳はまだ世に出てはいない。そして、無論のことだが、各訳書にはそれぞれの訳者の考えを反映して全巻からの取捨選択がおこなわれており、そこにある種の問題が存在しないわけではない(22)だが、これも当然のことに、各訳書には訳者の手による解説が付されており、わけてもディキンソンによる「序論」は現在においても『ポリクラティクス』研究の基本文献としての評価を失っていない(23)ところで、そのうちの最新版であるニーダーマンの訳書に付けられた「序論」はとくに八〇年代以降の現在の研究水準——ニーダーマン自身がその指導的な研究者の一人であるが——を知るのに極めて有用であるが、その冒頭を編者(ニーダーマン)はこう書き始めている。

「ソールズベリのジョンの『ポリクラティクス、宮廷人の愚行と哲学者の足跡について』は、ラテン中世において書かれた最初の広範囲にわたる政治理論書と一般に認められている。約二五万字からなる『ポリクラティクス』はしかしながら、たんなる理論的な政治論文以上のものである。それは道徳神学の書であり、諷刺の書、思弁哲学

書、訴訟手続きの書、自己慰撫の書、聖書注釈書であり、そして深い個人的瞑想の書でもある。要するに、『ポリクラティクス』は十二世紀のヨーロッパの最も学識ある宮廷官僚の一人の哲学的回想録なのである。『ポリクラティクス』という題名はギリシヤ語を模した新造語であって、その著作の政治的内容をとらえると同時に古典の学問と教養の意味を伝えるためにジョンによって考案されたもののように思われる。⁽²⁴⁾

このように、ここでも『ポリクラティクス』の主題の多様性が指摘されている。現代の研究者たちがしばしばこの書を首尾一貫性がなく、体系的でもなく、高度に散漫な作品と見なしてきたのも、ある意味では故なしとしない。例えば、バイクは自分の英訳担当部分（全八巻のうち、一、二、三巻の全訳と、七および八巻の部分訳）を指して、「この巻に含まれている『ポリクラティクス』の部分は先訳（ディキンスンによる同じく抄訳書）の部分よりも首尾一貫性がない。実際、これは非常に散漫なので、当時の文化の百科辞典と呼ばれるし、またそう呼ばれても間違いはないであろう。」⁽²⁵⁾と述べているし、ブルックはまた次のように語っている。

『ポリクラティクス』と『メタロギコン』は自由学芸の、哲学と政治学の巨大な百科全書の二つの断片であるかのように思われる。……ジョンの著作は古代的問題と現代的問題の博物館である。魅力的な肖像画や風景画で満たされ、アイディアも豊富であるが、ガラタで取り散らかされ、体系だったところはほんのわずかしかない。そこには中世の人文主義者がもっていた文芸的才能のすべてがある——豊かで優雅なラテン語の文体、辛辣な思想、明澄な例証、多くの興味をかき立てるストーリーと範例。たった一つのことだけが彼には欠けている。すなわち、一冊の書物を書く能力である。叙事詩やドラマ、あるいは近代小説の分野は彼には未知のことだった。『ポリクラティクス』には良いことが一杯書かれているが、あまりに散漫で、読み通すには論旨が一定していない。⁽²⁶⁾

『ポリクラティクス』が私たちの近代的感覚からいって、はなはだ冗漫で、読み通すに骨の折れる作品であるこ

とは、確かに率直に認めねばならぬところであろう。だが、一体に、中世の、なかんずくラテン古典の復興の目覚ましかつた十二世紀のルネサンスの文学作品にはこうした主題 (*topos*) の多様性からくる煩瑣な傾向は珍しいわけではない。クルティウスが『ヨーロッパ文学とラテン中世』⁽²⁷⁾ (一九四八年) で精力的に取り組んだように、元来トポスは古代修辞学の体系のなかに組み込まれたものであり、いかにしたら人々に自己の語るところを説得的に訴え、支持を取り付けることができるか、に係わる文学上の技巧でもあった。したがって、そうした文学上の伝統を汲み、多くのトポスに彩られた書物でもある『ポリクラティクス』だけが当時の世界にあって、とくだんに孤立した現象とは言えない。大切なことは、近代の政治観念をそのまま無前提に『ポリクラティクス』に遡及的に適用するのを慎むことである。そうした態度からは『ポリクラティクス』理解への道はけっして開かれることはないにちがいない。

では、どのようにしたら『ポリクラティクス』に接近できるのだろうか。まず基本的な事柄から確認していくことにしよう。そもそも『ポリクラティクス』 (*Politricus*) なる奇妙な題名は一体、なにを意味するものなのだろうか。ニーダーマンの前述の言葉にも触れられているが、この題名はどうやらジョンによる新造語のようである。それも容易に気づくことであるが、彼のもう一つの主著『メタロギコン』と同様に、ギリシア語の響きをもっている。「メタ (*meta*)」 (*about for or on behalf of*) + 「ロギコン (*logikon*)」 (*logic or logical studies*) の合成語が『メタロギコン』となっているように、『ポリクラティクス』はおそらく「ポリス (*polis*)」 (*polis*) + 「クラティン (*kratid*)」 (*to govern*) の組み合わせからなる言葉であろう。⁽²⁸⁾ ジョン自身、『ポリクラティクス』のある箇所です。私の課題はむしろ政治国家における人間の生活を分析することである。」 (*Vita potius politicorum excutienda est. VI.17*) と述べていることを考えると、『ポリス (国家) 統治論』というところかもしれない。しかし、

プールが「この題名は唯一の plausible な解釈として『*The Statesman's Book*』を指し示している」⁽²⁹⁾（一八八四年）と語って以来、しばしばそのように訳される場合がある。例えば、ディキンソンは最初に公刊された英訳書（一九二七年）の訳名に逸早くそれを採用したが、ウェップも『ポリクラティクス』の校訂注釈書を公刊した後に世に出した単独のジョン研究書（一九三二年）のなかで、『ポリクラティクス』は多分『*The Statesman's Book*』とされるのがよい。⁽³⁰⁾と述べている。英米系の政治思想史の通史でおそらく最も古い業績はW・A・ダニングのそれ（一九〇二年）であろうが、そのなかで言及されているジョンと『ポリクラティクス』についてのその叙述は明らかにプールの研究に基づいている。ダニングはその「注」において、「この題名の意義は知られていない。題名についての憶説と本書の分析は、プールの書（一八八四年）を参照のこと。」⁽³¹⁾と記しているが、今日、『ポリクラティクス』がとくに『政治家の書』とか『統治者論』、『政治権力者』と訳されることがあるのはひとえにこれらの先駆的研究業績の影響によるものであろう。⁽³²⁾

ところで、『ポリクラティクス』という書物の基本性格を知るうえで押さえておいてよい点がもう一つ存在する。それはそもそも書物の題名にギリシア風の語をつけることが十二世紀の知的世界では一種の流行でもあったという事実である。例えば、アンセルムスの『モノロギオン』(*Monologion*) や『プロスロギオン』(*Proslotion*)、サン・ヴィクトルのフーゴの『ディダスカリコン』(*Didascalicon*)、ミルナルドゥス・シルウェストリスの『メガコスムス・エト・ミクロコスムス』(*Megacosmus et Microcosmus*)、コンシユのギョームの『ドラグマティコン』(*Dragmaticon*) などいずれも同様で、ここに十二世紀精神のもつ共通の性格が窺われる。だが、こうした現象はなにを意味しているのだろうか。

ギリシア語風の題名をつけることが流行だったという指摘はウェップ⁽³³⁾によってなされ、おそらくそれに基づいて

であろうが、ホイジンガも⁽³⁴⁾そう言っているが、ただしその指摘はそこまで両者ともその意味するところについては別に言及していない。⁽³⁵⁾ある意味では、この現象はいくぶん奇妙なことに思われるかもしれない。というのも、ジョンに限って言っても、彼はギリシア語を知らなかったというのが研究者の間での一致した見解だからであるが、それ以上に、ジョン自身がギリシア世界よりもローマ世界のほうが知的に優位すると考えていたようだからである。そのことはローマのキケロやセネカをジョンが特別に敬愛し、「我らがキケロ」⁽³⁶⁾ (*Cicero noster*)、「我らがセネカ」⁽³⁷⁾ (*Seneca noster*)と呼んでいるその呼び方からある程度推測できよう。例えば、『ポリクラティクス』のある章の「質素」(*frugalitas*)の徳を説く条で、ジョンはこう言っている。

「質素の」徳の薦めに関して言えば、ゼノンやソクラテス、プラトン、アリストテレス、そして哲学者たちすべてが声を揃えてその実践について語っていることで、十分であろう。しかし、それらはあまりに古い古代の権威の言葉であるし、彼らの言っている格言もあまり有名ではないので、我らがセネカの言うことのほうを聞くこと⁽³⁸⁾にしよう。」

あるいは、ギリシアよりもラテン世界に好意を示すジョンの認識がもっと直接的に窺われる言葉を引用してみよう。長編詩『エンティティクス』(*Etheticus*)の一節で次のようにジョンは謳っている。

「ラテン語世界はキケロ以上に偉大な人物をもたなかった。

その雄弁さの前にギリシアは沈黙した。

ローマを全ギリシアと匹敵させ、それを凌駕させたのはひとり彼だけである。」⁽³⁹⁾

とは言え、こうしたジョンのローマ世界への偏重の傾向から類推して、彼が自己の書物の題名にギリシア語風の語をつけた事実を奇妙なことと判断するとしたら、それは十二世紀精神の何たるかを読み誤ることに通ずるであろう。

う。こういう誤解が生じるのはことによると、ハスキンズの「十二世紀ルネサンス」⁽⁴⁰⁾ 観についての機械的な理解によるのかも知れない。周知のように、ハスキンズは十二世紀を古典文化の復興の時代と見なし、そこに「ルネサンス」の存在を指摘したわけであるが、彼が注目した古典文化はもっぱら「ラテン語古典」であった。しかし、ハスキンズ以後、「十二世紀ルネサンス」研究が一層進捗するにつれて、ラテン語古典の復興にとどまらない十二世紀の精神文化活動の多様な側面が明らかになってきている。⁽⁴¹⁾ もちろん、その場合、アリストテレスを中心にギリシア語文献の組織的、体系的な翻訳活動が完了するのは次の世紀である十三世紀であるという点については評価が動くことはないであろう。だがしかし、十二世紀においてもトレドを拠点とするスペイン・ルート、シチリア島のパレルモを中心地とするシチリア・ルート、ヴェネチアやピサを中心とする北イタリア・ルートの三つのルートを通してギリシア語やアラビア語の原典、あるいはギリシア語文献のアラビア語訳の書物が次々とラテン語訳されていたことが確認されている。十二世紀の知識人たちはこうしたルートを経て紹介されてきた古代ギリシアの哲学や科学を知り、人間や自然の新たな理解を獲得していった。ジャック・ルゴフの言葉を借りれば、「要するに彼ら〔十二世紀の翻訳者たち〕は、ラテン文化が伝えた遺産に欠けているもの、すなわち哲学とくに科学の欠落を埋め合わせたのである。数学はユークリッド、天文学はプトレマイオス、医学はヒポクラテスとガレノス、さらに自然学、論理学、倫理学はアリストテレスとともに蘇り、そこにこの翻訳者たちの測り知れない貢献が認められる。実際それらは単なる素材にとどまらず、方法ともなりえた。かくて論証を重視する風潮が知的好奇心をそそり、当時のいわゆる『新論理学』、つまりアリストテレスの『分析論前書』『分析論後書』『トピカ』『詭弁論駁論』が新たに紹介され、アリストテレス復権を志したボエティウスを通じて知られていた『旧論理学』に加わることになった。そこに、古代ギリシア思想がオリエントとアフリカを長いあいだ巡歴した末、西欧に伝えた衝撃と教訓とが見られる。」⁽⁴²⁾

こういう背景があったればこそ、例えばベルナルドゥス・シルウエストリスは自然を無限の創造力を秘めた生ける大宇宙 (*macrocosmos*) とし、人間をその大宇宙の中心に位置づけられた小宇宙 (*microcosmos*) とする自然と人間の関係把握をおこなうことができたし、その書物に『メガコスムス・エト・ミクロコスムス』というギリシア語風の表題をつけたのである。⁽⁴³⁾ 十二世紀の知識人たちはたんにラテン語古典に限定されない、ギリシア語やアラビア語の原典との接触をもっていた。したがって、この世紀にギリシア語を模した表題をもつ書物の流行が存在したことは、別段不可思議なことではない。ソールズベリーのジョンがその政治論書に『ポリクラティクス』なる題名を付したのは、実にそうした十二世紀に共通する知的雰囲気を共有したためにはかならない。そして、この十二世紀精神の一典型と見なされる『ポリクラティクス』において、人文主義者たるジョンは当時の社会や政治に対する痛烈な批判を試みたが、その批判の根拠となるのは自己の生きる世界で権勢を誇る支配者たちの対極にいて立派な生を全うしたと彼が判断する古代の思想家や哲学者たちの姿に対する限りない信頼の念だったのである。

Ⅲ ヘンリ二世不興事件 (1156—1157年) —— 『ポリクラティクス』成立の一誘因

『ポリクラティクス』 (*Policraticus*) は「宮廷人の愚行と哲学者の足跡について」 (*de nugis curialium et vestigis philosophorum*) という長い副題をもっている。この長い二重の意味をもつ副題に『ポリクラティクス』のメイン・テーマが端的に表明されていることは疑いが無い。だが一体、それはいつ、誰に向かって、何のために執筆されたのだろうか。

『ポリクラティクス』が最終的に書き上げられたのは、ジョンがカンタベリーの大司教テオバルドゥスの秘書の職

にあった一一五九年の晩夏から初秋にかけてのことと考えられている。それは同じくそのほぼ一カ月後に完成することになるもう一つの主著『メタロギコン』とともに、ときのイングランド国王ヘンリ二世の尚書部長官トマス・ベケット——この時、ベケットは同時にカンタベリの副司教（司教座助祭長）であった——に献呈された。ジョンのこの二大主著の完成年と、それらがともにベケットに捧げられたことを確認できる証拠は十分にある。というのも、この一一五九年という年はヘンリ二世のトゥールーズ包囲攻撃——同年の七月に始まり、九月末まで続いたが、この期間、ベケットはヘンリ二世のフランス攻撃遠征軍に加わり、自ら七百人の騎士団を統率する指揮官として南フランスのトゥールーズに駐屯していた——と、ローマ教皇ハドリアヌス四世の死（八月三十一日）という二つの重大な事件の起きた年として記憶されるが、そのことに触れる言葉をジョン自身が『ポリクラティクス』と『メタロギコン』双方のなかに残しているからである。例えば、『ポリクラティクス』の「プロローグ」でジョンは次のように述べている。

「貴兄がトゥールーズの包囲攻撃に忙殺されておいでの間に、『文学なき生活は生ける人間の死であり埋葬である』という考えに思いを致しながら、私はこの作品に着手し、宮廷生活の愚行からしばし我が身を解放したのであります。」

「文学なき生活は生ける人間の死であり埋葬である」⁽⁴⁴⁾とは実はセネカの言葉である。この言葉に『ポリクラティクス』執筆の意図が明瞭に現れているが、その点はまた後に触れることにしよう。それよりも、この「プロローグ」において「トゥールーズ包囲攻撃」(Dum tamen Tolosam cingitis) のことが言及されていることに注意を喚起しておきたい。この包囲についてはまた『ポリクラティクス』の最終章 (III 25) においても触れられているが⁽⁴⁵⁾、より注目すべきは同書では教皇ハドリアヌス四世についてはいまだ存命中として語られているので⁽⁴⁶⁾ (III 23) 一

五九年の夏(七月)にその「プロローグ」が書かれた『ポリクラティクス』は遅くともその秋(九月)には完成していたと思われる。そしてそれはまもなくジョンの生涯の友セルのペトルスのもとにも送られたことが知られている⁽⁴⁷⁾ (書簡「百十一」)。

同様に、『メタロギコン』の最終章は次のように書き出されている。

「……いまは筆を執ることよりも嘆き悲しむことこそ相応しい。世界がすっかり虚栄の軍門に下っていることを私としては確信せざるをえない。我々は平和を待ち望んできたが、一体、我々の身にふりかかっているものは何なのか。トゥールーズで荒れ狂っている大竜巻はいたるところでイギリスの人民とフランスの人民をかき乱している。我々が最良の友と見ていた王たちは互いに和解しがたい敵となってしまった。加えて、追い打ちをかけるように、我らの父なる教皇ハドリアヌスの死が全てのキリスト教徒の人民と国家を深い嘆きの淵に追いやった」⁽⁴⁸⁾

このように、『メタロギコン』ではトゥールーズの事件はもとより、教皇ハドリアヌス四世の死への言及がはっきりとなされている。教皇の死は一一五九年の八月三日のことであるが、このニュースへのジョンの言及は『ポリクラティクス』のなかには存在しない。して見れば、成立の順序として、『メタロギコン』は『ポリクラティクス』完成のすぐ後に書き上げられたと推測するのが自然であろう。これらの点に関しては、研究者の間にはほぼ合意が出來上がっている。

ところで、この二書が完成された一一五九年という年はまた教会人ジョンが当時の政教関係——すなわち、アイランド領有の承認や教会への兵役免除税などの問題を契機にイングランド教会の権威をめぐるフランス出身の若い野心的な王ヘンリ二世と、登位して日の浅いイングランド人ハドリアヌス四世との間で軋轢が生じていた——をめぐってヘンリ二世の不興を買い、王の側近たちと深刻な対立・不和のなかにあった時期とされ、そうした彼の

危機的な情況がこれら二書の執筆をつよく促したとする説が、ジョン研究の嚆矢 R・L・プール以来、リーベシュッツに至るまでの通説であった。⁽⁴⁹⁾

しかるにその後、この時期のジョンの公私にわたる活動の証言である彼の「書簡」の再検討をおこなった G・コNSTABULの研究⁽⁵⁰⁾によって、実はジョンの被った危機的な事件は一一五九年よりも前の一一五六年——一一五七年のことで、彼の二大主著の執筆とは少なくとも直接の関係は認められないことが明らかとなっている。

とは言え、この二書とりわけ『ポリクラティクス』という作品が当時の歴史世界に向かって一体、いかなる公的な狙いをもって執筆されたのか、を問題にしようとするれば、ヘンリ二世およびその側近たちと、ジョンとの間に生じた亀裂の意味を一一五九年以前にすっかり解決していた単なる一過性の事件として片付け、この作品との無関係を強調するだけに終わるとしたら、それもまたおかしな話であろう。というのも、一一五六年——一一五七年にかけてヘンリ王の不興を買った事件は、青春の十二年間の知的修業時代（一一三六年——一一四七年）を経て、カンタベリ大司教テオバルドゥスのもとに奉職し、おそらくそこから教皇庁派遣要員としてローマ教皇庁と係わり（一一四七年頃——一一五六年頃）、ついでテオバルドゥスの秘書（一一五六年頃）としてほぼ一〇年以上にわたってずっと政治と宗教、国家と教会の関係という時代の状況に裏方から深く関わってきたジョンにとって、はじめて経験するまことに憂慮すべき深刻な事態であったからだ。そしてこの時の経験がヘンリ二世の宮廷に屯する廷臣たち——そのなかにはリジューの司教アルヌルフのような人物もいた——への不信と嫌悪を決定的なものにさせ、それが一一五九年の政治論書『ポリクラティクス』完成の、少なくとも心理的な一因にならなかったはずはない。

「私はほんの一部であっても、私がいま現在置かれている情況について書き記そうかと思えます。私としてはもっと嬉しい知らせを貴兄に送ることができたらと思うのですが。ローマ教会から帰ってこのかた、運命が私の上

に苛酷な困難を山のように負わせています。それに比べたら、これまで私が経験したものはとても困難とは呼べないと思うほどです。貴兄はたぶん驚きもし、訝りもすることでしょう。一体、なにがそんなに私を不安に陥れているのか、と。端的に申しませう。我らが君主、全能の国王、無敵の君主は私に対して怒り心頭に達せられたのである。⁽⁵²⁾」〔書簡〕十九)

これはヘンリ二世の不興を買ったことにジョンが最初に言及した、セルのペトルス宛の書簡(一一五六年晩夏ないし秋)の一節であるが、ここには彼が受けた精神的衝撃のほどがいかに大きなものであったかがよく窺える。この時期、ジョンは既に病床に伏していた大司教テオバルドゥスに代わって、文字通り彼の分身として教会の公務に没頭していた。⁽⁵²⁾「ローマ教会から帰ってこのかた……」とあるのは、おそらく大司教の代理としてローマ教皇庁に出張していたことを指すのだが、この書簡はさらに次のように続く。

「王国のなかでひとり私だけが王の威厳を損なったと言われています。彼らが私の犯した行為を周到に言い立てる場合、こんな非難が私の頭上めがけて飛んでくるのです。我々の間で誰かがローマの名を呼べば、それは私ということになります。選挙をおこなうにつけ、教会の訴訟問題を審理するにつけ、イングランド教会が自由の影すら主張すれば、まるで私ひとりがかンタベリの大司教殿下や他の司教方に対して、何をなすべきかを指図しているというふうに言われるのです。それですから、私の立場は根底から揺らいでいます。彼らが非常な圧迫を加えるので、私は処罰の危険に晒されています。もし必要なら、私は平静な気持ちだけでなく喜びさえもって、正義のためにこの運命に耐えもするでしょう。一月の始めにもイングランドを離れたいと思います。貴兄と相談の上、フランスに滞在するか、ローマ教会に赴くか、したいと思えます。」⁽⁵³⁾〔書簡〕十九)

結果を言えば、このときのジョンの思い詰めた決意は実行に移されることなく事態は一応平穏に収まった。ジョ

ンに対する王の側近層の妬みや不信は相変わらず熾り続けてはいたものの、明けて一一五七年の夏にはヘンリ二世の不興はひとまず解けていたからである。これにはもちろん、その間、王に対する執り成しを要請する書簡をジョンが尚書部長官トマス・ベケットに宛てて直接、間接に書き送っていたことも功を奏したかもしれない。⁽⁵⁴⁾

しかしこの事件を巨視的な視点から見ると、そこには単に一過性の問題として一蹴してしまおうわけにはいかない問題が横たわっている。事の起こりは一一五五年の秋から一一五六年の夏にかけてヘンリ王がベネヴェントに滞在していた教皇ハドリアヌス四世のもとに使節団を送り、アイルランド征服への承認を取り付けようとしたことに始まる。このときジョンはヘンリ王の使節の一員か、カンタベリー大司教の代理として教皇庁にいたのであるが、このときジョンの採った態度が著しく親教皇的であるとの報告が王の使節団とりわけリジュエーの司教アルヌルフによって王にもたらされた。事實はいまひとつ定かでないにしても、そこでジョンが結果としてハリドアヌス四世の教皇至上主義的理念に加担したという印象を王の使節団に与えたことは確か⁽⁵⁵⁾のようである。と言うのも、ヘンリのアイルランド領有をハドリアヌスは「コンスタンス寄進状」に基づいて本来教皇に帰属するアイルランドの領土を封土としてヘンリ王に賦与するというかたちで承認したのであるが、この教皇権優位の政策の発案者はほかならぬジョンである⁽⁵⁶⁾と見なされるからである（*Meta. N. 42*）。しかも、教皇ハドリアヌスはジョンの古くからの友人でもあった⁽⁵⁷⁾。

とすれば、このときアルヌルフら王の使節団のメンバーの眼にジョンの立ち居振る舞いがどのように見えていたかは容易に想像がつくと言わねばならない。

「リジュエーの司教は神の教会を打ち壊す邪悪の槌であります。彼は哀れなる私への怒りを王にさかんに吹聴したあげく、王ご自身、御自らカンタベリの大司教殿下と尚書部長官閣下に向かって私が王の威信を低めたかどで王の

友と臣下の列から排除されるのが望ましいと言いつつ、触らしたのであります」〔書簡「三〇」〕⁽⁵⁸⁾

「私がどのような情況に置かれているか、考えてもみてください。昨年来のイングランド国王陛下の私へのご非難は嫉妬に駆られた輩によって私に向けられたものです。それは根も葉もないことですが、きついことです」〔書簡「三一」〕⁽⁵⁹⁾

一一五七年の初頭から夏にかけて、ジョンは教皇ハドリアヌス四世や友人セルのペトルスに宛ててこう書き送っている。ここには自分を苦境に陥れたアルヌルフへの憤懣やるかたなき思いが吐露されているが、しかしここに必要な感情はけっしてアルヌルフという一個人に対するたんなる私的な怨嗟のそれにとどまるものではなかった。むしろこの時点(一一五六年—一一五七年)で既に、アルヌルフに代表される王の側近の廷臣たちとジョンの間には人間的な肌合いの違いをも含めて、埋め難い溝が生じていたと考えたほうが自然であろう。実際、ジョンはやがてそれから二年後の一一五九年の晩夏から初秋にかけて『ポリクラティクス』を完成させ、そのなかで彼らに対する仮借のない批判を展開するのであるが、そこでの腰の据わった批判ぶりが二年前の彼の危機的情況とまったく無関係になされているとは考えにくい。

いずれにせよ、そこに透けて見えてくるのはいまやフランスのアンジュー家出身で「スコットランドの境域からピレネー山脈にまで及ぶ大帝国の支配者」であり、「当時ラテン的キリスト教世界の恐らく最強の君主」(C・ハスキンズ)として君臨していたイングランド王ヘンリ二世の宮廷に屯して、王にいささかの忠言も諫言もせず、日夜、王の顔色を窺い、追従に明け暮れするだけの王の取り巻き連(とジョンには思われた)と、そうした彼らに心底からの嫌悪の感情を隠さないジョンとの不和と対立の構図である。

「宮廷(court)が有名で強大であればあるほど、そこは人類にとっての疫病神、あるいは無辜の者を苦しめる拷

問人で埋め尽くされることになる。というのも、宮廷は邪悪な人間を迎え入れ、あるいはすぐさま人間を邪悪にさせるのが常だからであり、高い場所にいる彼らの交わりを通して彼らの悪業が思いのままにおこなわれるがゆえに、悪事における廷臣の大胆不敵さが増すからである。廷臣 (*curiales*) のなかにあって無垢でいることなどほとんど不可能なのだから、青年期に形成された善き性質の力に頼ろうとしても所詮無駄なことだ。一体、愚行 (*unguae*) によってその徳 (*virtus*) を破壊されないような者が宮廷にいるだろうか。一体、誰が墮落しないほどつよく、堅固だとかどうか。善き人間とは最も長く、最も効果的に抵抗し、最も墮落することの少ない者のことだ。徳がそのまま保たれるためには、その唯一の道は宮廷生活から身を引くことである。以下の詩の作者は、予言者的な洞察力で宮廷の本質をこう表現している。

彼をして宮廷から離れさせよ。

そこに正しさを保とうとする者など存在するのか⁽⁶¹⁾

これは『ポリクラティクス』のなかでジョンが語っている言葉であるが、「宮廷人の愚行と哲学者の足跡について」という副題をもつこの書物全体を大きく貫く彼の主張の核心がここに顕われ出ている。すなわち、『メタロギコン』の検討の際にも見てきたことだが、⁽⁶²⁾ジョンによれば、人間にとって一番大切なことは「徳」の涵養と「人格」の陶冶ということであった。しかるに、「宮廷」はその本質である「愚行」のゆえにそうした人間性の完成に適しない最悪の場所である。そこでは「愚行によってその徳を破壊されないような者」は存在しえないのであり、徳をたもつ「唯一の道は宮廷生活から身を引くこと」以外にはありえないというのである。

こういう激しい宮廷生活への弾劾と告発の言葉がきわめて短期間のうちに彼の内部に醸成され、一一五九年のある日、ある時、突然のように迸り出たというふうには到底考えることはできないであろう。それはむしろ一一五六

年——一五七年の不興事件を間に挟むジョンの一連の教会政治活動、つまりカンタベリの大司教の秘書として大司教座とローマ教皇庁、イングランド教会とイングランド王権、そうしてイングランド王権と教皇庁との複雑で錯綜した関係のなかに置かれてきたジョンのけっして短くはない公的な活動経験のある時期から彼の心のどこか奥底に徐々に芽生え、膨らんでいったものと見なすのが自然であるにちがいない。

Ⅳ ポエティウス『哲学の慰め』とジョン——『ポリクラティクス』の内面的動機

「文学なき生活は生ける人間の死であり埋葬である。」

ソールズベリーのジョンは『ポリクラティクス』の「プロローグ」の末尾近くで、セネカの言葉を引用しつつ、その著作を執筆するにいたった自己の内面の動きの一端を明らかにしている。すなわち、

「貴兄がトゥールーズ包囲攻撃に忙殺されておいでの間に、『文学なき生活 (*otium sine litteris*) は生ける人間の死であり埋葬 (*mors et uia hominis sepultura*) である」という考えに思いを致しながら、私はこの作品に着手し、宮廷生活の愚行からしばし我が身を解放したのであります。」

別の機会に確認しておいたことだが、ジョンにとって、「文学」とは古典の単なる鑑賞や享受ではなく、それを通して人間が「徳」を培い、「人格」を磨くこと、言い換えれば「人間性の完成」ということを意味していた。したがって、ここにいう「文学なき生活」とは、端的に「人間性の完成なき生活」を指しており、これは文字通り「生ける人間の死であり埋葬」であるということになる。したがってまた、ジョンが「愚行」という表現で痛烈に批判しようとした「宮廷生活」のさまざまな病理現象はこの意味で「文学なき生活」の堕ちいく当然の結果にほかなら

ない。こういう言葉を添えつつ、自書を献呈した相手はトマス・ベケット。当時（一一五九年）、ベケットはヘンリ二世によるトゥールーズ攻囲に加わり、自ら指揮官としてその地の野営の陣のなかにいた。

だが、一体、ジョンは本当のところなにゆえにベケットを自己の書の献呈の相手に選んだのだろうか。ベケットはこのときヘンリ二世の尚書部長官という俗権の世界に身を置く立場にあったが、同時にカンタベリの司教座助祭長でもあり、聖俗両方の世界に生きるいわば双頭の人であった。一方、ジョンはカンタベリの大司教テオバルドゥスの私設秘書であり、その人格的な影響力をもあわせて大司教にふかく臣従していた。そのジョンが直接の主君テオバルドゥスを差し置いて、助祭長兼務のままにイングランド王権の尚書部長官であったベケットに自書を献呈したという事実には、やはりそれなりの意図が存在しなかつたはずはない。それは一体、何だったのだろうか。この問題を明らかにすることは当然のことながら、『ポリクラティクス』という書物そのものの思想を明らかにすることにつながるにしても過言ではない。

ところで、そうは言っても、テオバルドゥスではなく、ベケットを献呈の相手に選んだことの少なくとも外面的な理由はすぐに見いだせる。『ポリクラティクス』の完成する一九五九年の当時に先立つ、四、五年前の、おそらくは一一五五年頃以降より、カンタベリの大司教テオバルドゥスは重い病の床に伏しており、ジョンは事実上、大司教の職務を代行していたのである。

「私の父であり、主君であるカンタベリの大司教テオバルドゥスは深刻な病の床にある。快方に向かうのか、もっと悪くなるのか、皆目わからない。彼はもはや以前のようには職務を全うすることができないので、私にこの重い責任を委ねている。私の肩に彼は教会の仕事を監督するという背負い切れない重荷を背負わせた」⁶⁴

この言葉は『ポリクラティクス』と同年に書かれた『メタロギコン』の最終章でのジョンの発言であるが、ここ

からも当時のテオバルドゥスとジョンとの関係が容易に推察できよう。要するに、当時のイングランドの政治と行政のあり方、そしてそれと深く係わる教会の高位聖職者たちの振る舞いに対して義憤を隠せなかった彼は自ら筆を執って成した政治論書を世俗統治の任にあるベケットにこそ読ませて政治の浄化を図りたかったのであり、既に當時者能力を失っていたとはいえ、あくまでも教会人であったカンタベリ大司教テオバルドゥスに捧げるつもりはなかったのである。このことはもともと自らの配下であるカンタベリの副司教(司教座助祭長)であったベケットをヘンリ二世に対してイングランド王国の尚書部長官に推薦したのがほかならぬテオバルドゥスであったことを思えば、むしろ主君テオバルドゥスの意向に沿う当然の所作だったとも言えよう。⁽⁶⁵⁾だが、この事実は、『ポリクラティクス』献呈の相手にベケットを選んだ本当の意味を理解するにあたっては、たんなる表層的な出来事ではない。問題はそうした外面的な理由よりも、もっと深い内面的な理由を探索することではなければならないであろう。そこには、一体どんな意図が秘められていたのだろうか。

「もっと違った分野のために研鑽を積んだはずなのに、私は既に十二年間も「行政職のために」浪費してしまつたことに後悔と恥ずかしさで一杯です。より聖なる哲学によって育てられた者が離乳のときには、宮廷人の社会に入るよりも哲学者の仲間入りをするほうがずっと良かったのです。貴兄も同じ立場におられるものと存じます」⁽⁶⁶⁾

ジョンは『ポリクラティクス』の「プロローグ」で献呈の当の本人であるベケットに向かって、こう語りかけている。しかし、そのすぐ後でジョンはさらに次のように付け足している。

「貴兄はこの世の支配者である虚栄に対して命令を下しておられます」⁽⁶⁷⁾

であるがゆえに、自分は貴兄に期待するところ大なのだ、否このイングランド王国の統治の現状を真に憂い、そ

の退廃の根である宮廷社会の根底からなる改革をヘンリ王に迫って、これを断行せしめる力をもった人物はイングランド王国広しと言えども、いまや尚書部長官にして副司教たる貴兄以外には存在しえないのだ、こうジョンはベケットに呼びかけているかのようである。ここには、過去十数年にわたって教会の同僚にして知友の關係——しかも二人は同世代であった——にあったベケットに対するジョンの並々ならぬ感情の昂ぶりがある。ジョンはおそらくパリでの修業時代にベケットと出会っていたし、一一四八年にはランスの公会議で、一一五二年にはローマ教皇庁で会い、そして一一五四年にはともにカンタベリ大司教テオバルドゥスの宮廷に仕えていた。一一五六年にヘンリ王の不興を買った折、ジョンのために執り成したのもベケットであった。⁽⁶⁸⁾

「本書は一部は宮廷人の愚行 (*nugae curiales*) を集中的に扱うものです。それは煩わしいの極みですが、愚行について詳細に論じております。もう一部は哲学者たちの足跡 (*vestigia philosophorum*) を懸命に迫るものです。その足跡を時に応じて追うも避けるも、それは賢者の判断に委ねるつもりであります。そしてこれはどなたかを傷つけてはなりませんので、愚行など想像だにしえないお方、すなわち現代の最も傑出した存在である貴兄に本書を捧げるのが相応しかろうと存じた次第であります」⁽⁶⁹⁾

このように、『ポリクラティクス』の「プロローグ」で、ジョンは「宮廷人の愚行」と「哲学者の足跡」という二つの主題——それがこの書の副題になっていることは既に言及しておいた通りである——について論じるのがその目的であると語り、ベケット以外にはこうした主題をもった書物が捧げられるに最も適した人物は考えられないと持ち上げている。『ポリクラティクス』全巻のために置かれたこの「プロローグ」だけを読むかぎり、そこに私たちはベケットに対するジョンの側の一方的な期待感の表明のみがなされているような印象をもつ。しかし、そう受け取るのはいささか早計である。というのも、ベケットへの直接の言及はなにもこの「プロローグ」だけに限定され

ているわけではなく、各巻の「プロローグ」の大部分といくつかの「エピローグ」にも見られるからである。そのなかで、第七巻の「プロローグ」は特に注目に値する。そこでジョンは自分が宮廷人の社会にいて時間を徒に浪費してしまったことを悔やまずにはおられない自己の心の内を打ち明けると、ベケットはいつもきままって自分を励まし、「神がご自身を顧し、自分の境遇をより善いほうに変えてくださるまで、つよい心で臨むように」と言い、「懐かしい歌詞や甘美な歌声で労働の単調さを忘れ、和らげようとする労働者たちのように」振る舞えと諭してくれた、と告白している。「五感に心地よい物語や甘美な歌声の旋律によって浄化されるとき、そこに至るまでの道程は旅人にとっては難儀の少ない、短期間のものになるのだ。」⁽⁷⁰⁾と。そうして、ベケットはさらに次のように忠告してくれたとジョンは言う。

「貴兄はまた読書かなにかに没頭するようにとおっしゃり、他になにもしないとしても、自分の境遇と運命の気まぐれについて、少なくとも自分自身と詩女神たち(Musae)には嘆き悲しむ様を語れ、と言われました。哲学を志す者にとって、それは自らの徳の欠如を悔いるための重要な一步と存じます。」⁽⁷¹⁾

ハンス・リーベシュッツはこの条に『哲学の慰め』を書いたポエティウス(四八〇年頃—五二四年)の影を見て、「ジョンは多分、哲学の貴婦人自身によって改心せしめられ、より良い思考方法を示される前に、不安のさなかに詩女神たちによって助けられたポエティウスの範に倣うようにトマスが自分に忠告してくれたという⁽⁷²⁾ことを、自分の学問的書物の未来の読者に理解してほしかったのであろう。」と指摘しているが、これはけだし炯眼である。というのも実は、この箇所でジョンは「詩女神たち」(Musae)という言葉を用いているだけで、ポエティウスのことも、『哲学の慰め』のことも一言も触れてはいないからである。このことは古典作家の名をあれほど過剰なまでに引用することを好むジョンの傾向性——もっとも、後述するように、彼はときには引用する著者の名を明記するのを

省略する場合がある旨の発言をしているが (*Politr. pro.*) —— を考えると、少なからず尋常でないものを私たちに感じさせる。⁽⁷³⁾ だが、考えてみれば、そこにかえって、ジョンの心の内が透けて見えるのではないだろうか。リーベシュッツの指摘が炯眼だと言ったのはそういう意味も含めてなのだが、一体、ボエティウスの『哲学の慰め』とはジョンにとって何だったのだろうか。

言うまでもなく、ボエティウス⁽⁷⁴⁾は五世紀末から六世紀前半に生きたローマの哲学者である。この時代は西ローマ帝国の崩壊後、フランク王国を中心に西欧世界が再編成されて中世という新たな時代を切り開いて行く歴史の過渡期にあたっている。ローマ屈指の名門に生まれた彼はそうした歴史の崩壊と再生の時期に、イタリアを支配した東ゴート王テオドリックの下で執政官を務め、次いで宰相にまで上り詰めた政治家でもあった。その彼が王の伝奏官であったキプリアヌスなる人物の讒言に遭い、ビザンティン皇帝ユスティニアヌスと気脈を通じて王に対する陰謀を図ったという科で入獄し、果ては筆にするのものはばかれるほどの残酷な拷問を受けたうえで処刑される。『哲学の慰め』⁽⁷⁵⁾ (*De consolatione Philosophiae*) は彼が死の直前、獄中にあつたとき書かれたものであるが、それは我が身に降りかかった運命の不条理を「詩女神たち」に伴われて嘆くことから始まって、「運命の女神」 (*fortuna*) の気まぐれにはなく、「哲学の貴婦人」 (*Philosophia*) の影響の下に次第にそれを甘受していくまでの魂の軌跡である。最終的な彼の心境は、どんなに不条理に見えようとも、この世は神の底知れぬ意志によって支配されており、神は結局は「善行には必ず善い報い（賞）が、悪行には必ず悪い報い（罰）を割り当てる」 (*M—M*) のであり、それを信じて「徳性」を養うことがこの世の人間の務めであるというものであった。

『ポリクラティクス』第七巻の「プロローグ」を書いていたとき、ジョンの胸中に自分よりも六世紀前のこのボエティウスの姿が去来していたことは確実である。恐らく、ジョンには「都から五〇〇マイルも離れた所」⁽⁷⁶⁾にある

東ゴート王の暗い獄舎のなかで『哲学の慰め』を執筆しているポエティウスの姿は、イングラント王の廷臣たちと軋轢をきたした上に王の不興まで買って失意の淵に佇んでいる自分自身の姿でもあったにちがいない。明らかに、このときジョンは運命の女神の気まぐれに翻弄されて、どうにもならぬ境遇に陥っている者のみが交わしうる感情の交換をポエティウスとおこなっていたと思う。『哲学の慰め』第一巻で、ポエティウスは嘆きの歌を歌うしかなす術のない自分を叱責する「哲学の貴婦人」に向かって、なにゆえに自分が現在の不運な情況に立ち至ったかを、次のように語っている。

「私が運命のむごい仕打ちを受けていることを、今さら言う必要があるでしょうか。分りすぎるほど明らかではありませんか。……(中略)……しかしあなたは『知恵を探求する人々(哲学者)が国家を支配するようになるか、あるいは政権を握っている人々が知恵を探求するようになるか、国家は幸福になるであろう』という考えを、プラトンの口を借りて断言されました。あなたはまた同じ人の口を借りて、賢人たちがどうしても国政に参加しなければならぬ理由は、邪悪なあさましい市民どもに都市の支配権を委ねて、善良な人々に災害と破滅をもたらすようなことがあってはならないからである、と忠告されました。それですから私はその勧告に従って、ひそかに閑暇を楽しんでいる間にあなたから学んだことを、国家行政の実際に応用しようと思ったのです。私が官職に就いたのは、もっぱら善良なすべての人々に共通な熱意に駆られた結果であることは、あなたも、またあなたを賢人たちの心に忍びこませた神も御存じです。邪悪な人々との間の重苦しい冷酷な不和が生じたのも、また良心の自由の命ずるとおり法を守るためには、絶えず権力者たちの不興を招くことを何とも思わなくなったのも、それがもとです。」⁽¹⁷⁾

言うまでもなく、ここに表明されているのはプラトンの哲人政治の理想である。ポエティウスはその観念を「哲学の貴婦人」から教授されたと言い、その教えに忠実にしたがって官職に就き、「国家行政の実際」に応用しようと

して実践した結果、「絶えず権力者たちの不興を招くことを何とも思わなくなった」と言う。そして、自分がどのよう
に国家行政に携わり、そこでいかなる出来事がおこったかを列挙した上で、こう言うのである。

「……私はまた元執政官のアルピヌスが早まった告発によって罰せられるのを防ごうとして、上訴者のキプリア
ヌスの憎悪を一身に浴びました。私は自分に対する激しい敵意を十二分に燃え上らせた、とお考えでしょうか。し
かし私は廷臣たちの間では、正義を愛するあまり、身の安全を図って手心を加えることなど少しもしなかったの
すから、私の安全はなおさらほかの人々が守ってくれるはずでした。」⁽⁷⁸⁾

ところが、ポエティウスの期待は空しい結果に終わった。彼は密告者たちによって告発されたばかりではなく、
頼みとした元老院までもが自己保身に汲々としたあげく彼を見捨ててしまう。そこでポエティウスはやむなく、こ
う決心をするに至るのである。

「私はこの事件のいきさつと真相を、後世の人々から隠されることのないように、書き残すことにしました。」⁽⁷⁹⁾

『哲学の慰め』の執筆の動機をこのようにポエティウスは自ら明らかにしている。こうした言葉をジョンはどう
読んだであろうか。リジューのアルヌルフに代表されるヘンリ二世の廷臣たちに包囲され、ヘンリ王の不興まで
買って孤立状態に置かれていた彼にとって、「良心の命ずるとおり法を守るためには、絶えず権力者たちの不興を
招くこと」も恐れず、結局密告者たちや元老院によって失脚の憂き目に遭うこととなったポエティウスの立場はほ
んど彼自身のそれと二重写しのものになっていたのであることは想像に難くない。一一五六年の王による不興事
件を契機に『ポリクラティクス』執筆を思い立ったジョンの胸のうちには、間違いなくこのポエティウス体験が存
在したと言つてよい。

『しかし今は嘆くことよりも、葉を与えるときである』と彼女は言った。それから彼女は私を見すえてこう言っ

た。

『あなたがかって私の乳で育てられ、私の食物で養われて、男らしい強い精神を身につけるようになった人ですか。私はあなたに、投げ捨ててしまわないかぎり、打ち破れない堅牢な造りであなたの身を守るような武器 (armor) を、渡しておいたではありませんか。』⁸⁰⁾

『哲学の慰め』第一巻で、はじめは「詩女神たち」にすがって自己の不運な境遇について嘆き悲しむことで己の精神の均衡を回復しようと足掻くポエティウスに対して、「哲学の貴婦人」はこう叱責している。ここに言われる「投げ捨ててしまわないかぎり、打ち破れない堅牢な造りであなたの身を守るような武器」とは、言うまでもなく「哲学の武器」を指している。そしてこれにまさに呼応するかのよう、ジョンもまた「詩女神」とともに自己の不運についての嘆きの歌を歌え、と薦めるベケットの忠告に逆らうように、次のように語るのである。

「貴兄は、他にになにもなしえないとしても、私が自分の運命について思いを馳せ、詩女神たちに助力を求めるようにと申されました。その忠告は私の心の苦しみに容易く応えるものです。と言いますのも、ナジアンズスのグレゴリウスが証言しているように、不適當な問題について考え、不適當な目標について思案することにもまして好都合なことは人間にとってないように思われるからです。けれども、このことはきちんとした心をもった人にとっては無縁なことのように思えます。なぜなら、賢者ならば運命のあらゆる攻撃に対して、不満を述べるのではなく、理性の楯 (scutum rationis)、それは運命の気まぐれに対する一種の哲学的防御なのですが、その楯によって立ち向かうことこそ相応しいからなのです。」⁸¹⁾

さて、ジョンはこうしてポエティウスの範に倣って、「運命の女神」の攻撃について不平を鳴らすのではなく、「哲学の貴婦人」の導きにしたがってその攻撃を「理性の楯」という「哲学の武器」によって防ぐのだ、と宣言し

ている。このように、ジョンにおけるポエティウス体験が『ポリクラティクス』成立の内面的動機をなしていることはもはや繰り返す必要はないであろう。だが、ポエティウスの『哲学の慰め』とソールズベリーのジョンの『ポリクラティクス』との間には、一つの決定的に異なる側面が存在している。それは哲学者（思想家）と世俗の政治家とを自己の内部に同居させていたポエティウスとは違って、思想家たるジョンは教会の行政官ではあっても、決して世俗政治家ではなかったということである。そしてまさにその意味において、政治批判の哲学的著作『ポリクラティクス』はイングランド王国の国王ヘンリ二世の尚書部長官として現実政治の真っ只中にいるトマス・ベケットにこそ捧げられねばならなかったのである。

V 『ポリクラティクス』の主題と構成

全八巻からなる『ポリクラティクス』はどのような内容的構成をもっているのだろうか。この書には二つの主題があることは再三にわたって確認してきた通りである。すなわち、副題が示すように、「宮廷人の愚行と哲学者の足跡について」がそれである。

したがって、この書をはじめて繙く読者はまず全巻がこの二つの主題に沿って構成されていることを知っておくのがよいであろう。『ポリクラティクス』の校訂注釈書（一九〇五年）⁽⁸²⁾を著したウェップは全八巻からなるその書の第一部（第一巻―第五巻）と第二部（第六巻―第八巻）に分けているが、その後⁽⁸³⁾に公刊した単独のジョン研究書（一九三二年）のなかでこの最初の五巻（第一部）が「宮廷人の愚行について」に相当し、後半の三巻（第二部）が「哲学者の足跡について」を扱っていると述べている。他方、ウェップよりも先に（一八八四年）、ジョン研究の草

分けてあるプールも『ポリクラティクス』を同じく二部構成と見ている。⁽⁸⁴⁾ ただしウェットと異なり、そのうちの第一部を第一巻から第六巻までとした上で、さらにそれを二つに区分している。すなわち、彼によれば、第一巻から第三巻までが「国家の健康な生活に対する障害物、すなわち国家の活動を阻害する悪徳と愚行とを明らかにすること」であり、次の第四巻から第六巻までが「宗教国家に対する世俗国家の必然的な従属に基づいた、理想的な統治システムの枠組みを示すアウグスティヌス以降の最初の試み」であると言う。そして、後半の第二部(第七巻―第八巻)において「いくつかの哲学の学派の概観から真の知識原理の強調へ、哲学の目的の決定へ、そして感覚に対する精神、物質的なものに対する理念的なもの優位性の主張へ」と議論が進んでいる、と分析している。

全体が大きく二部——前半部(第一巻―第六巻)と後半部(第七巻―第八巻)——に分かれ、そのうちの前半部がさらに二つ——第一巻から第三巻までと、第四巻から第六巻まで——に分かれていると見なしている点においては、のちほど参照するハンス・リーベシュツの分析も基本的にはプールと同じであるが、この場合、巻数だけに注目すれば、前半部が後半部の三倍に相当するので、量的にははるかに多いと思われるかもしれない。しかし、ウェブの校閲版で頁数を見ると、前半部は四四四頁、後半部は三三六頁という割合になっていて、実際には約一〇〇頁強の差であることがわかる。

さて、リーベシュツの分析に依拠して改めて『ポリクラティクス』の構成を見てみよう。⁽⁸⁵⁾ 宮廷生活に対する批判が展開されている前半部(第一巻―第六巻)はその主題とするところにしたがって、またさらに二つの部分に分けられる。すなわち、その前半(第一巻―第三巻)は統治者階級(宮廷人)の娯楽とその私的習慣が扱われている。これはジョンの言う「愚行」を指しており、「狩猟」、「賭博」、「音楽」、「演劇」、「魔術」、「占星術」などが取り上げられている。次いで後半(第四巻―第六巻)は君主および廷臣たち(行政官)の公的な活動が論じられてい

る。この部分は『ポリクラティクス』の最も中心的な部分であって、ジョンの政治的プログラムを知り得るのもまさにここである。この中世政治思想の代表的作品をより広範な読者に提供すべく、その現代語訳をいちはやく世に問うたディキンソンの英訳書（一九二七年）がこの部分（および第七巻と第八巻のそれぞれ一部を含む）に限定されているのも、ある意味で領けるところであろう。つまり、そこにはジョンの政治思想が集中的に展開されていると見なす判断があったことになる。また、この部分を「理想の統治システムの枠組みを示すアウグスティヌス以降の最初の試み」と評価した前述のプールの見解も影響していたかもしれない。

この第四巻から第六巻の部分を、いまだし詳しく見ておこう。ディキンソンがその英訳に付した各巻の簡単な内容説明では、第四巻は「君主と法について」、第五巻は「国家とその構成員、および特に司法について」、第六巻は「国家の武装した手、およびその頭と四肢の相互の結びつきについて」ということになる。⁽⁸⁶⁾ここからも、この部分の内容のあらましがある程度わかるが、リーベシュッツの分析と、ウェップの校閲版を参照しながら、もう少し詳しい内容確認を試みよう。第四巻はまず法にしたがう君主と法にしたがわない暴君との相違の定義からはじまる。次いで君主の守るべき規範や諸々の義務に関する議論がもっぱら『旧約聖書』『申命記』第十七章のなかの「王に関する規定」（14—20節）についての注解という形で詳細に展開されている。それらはほぼ四つの問題——宮廷生活、王の財政、法の解釈および王朝の継承——に絞られている。

第五巻はローマの有徳な皇帝トラヤヌスに献呈された『トラヤヌスの教育』と題されたブルタルコス（書簡）に基づいて、国家（*res publica*）が人体の比喩によって表現される有名な議論ではじまる。すなわち、国家という政治体はその頭が君主、魂が聖職者であり、元老院は心臓、君主のために州で働く裁判官、行政官は眼、耳、舌、社会を護る官吏と戦士は手である。また君主を常時補佐する側近は脇腹であり、財務と内廷費を司る役人は胃

と腸、そしてこれらすべてを下で支える足が農民と職人であるとされる。⁽⁴⁷⁾

このように、国家が人体の比喩で語られ、国家の各構成員とその関係が人体の各器官とその相互の関係という形で逐一論じられているが、この人体としての国家という觀念の着想をジョンは一体、どこから得たのであろうか。リーベシュッツはそれをバリでのジョンの神学の師であり、後に枢機卿となったロベルトゥス・プルスの『命題集』から引き出していると見ている。彼は『ポリクラテイクス』の第五卷および第六卷の主題配列が『命題集』のものと酷似しているという点に着目して、そういう判断をくだしている。⁽⁸⁸⁾リーベシュッツはまた、『トラヤヌスの教育』なる論文の真偽についても触れて、それは「古典の權威をもち出してくることによって自らの政治批判の個人的性格を覆い隠すために使ったフィクション」であると断言している。⁽⁸⁹⁾だが、ジョンの人体の比喩をもって表現するその有機体的国家論や『トラヤヌスの教育』の真偽に関する問題等に関して立ち入った評価や分析はおこなわないことにする。⁽⁹⁰⁾ここでは、『ポリクラテイクス』という政治論書が一体、いかなる主題をもっており、どのような構成のもとに書かれているか、を確認することが第一義の課題だからである。

第六卷では、第五卷で展開された人体としての国家のなかの一員、すなわち「武装した手」としての戦士——これに対して「武装していない手」とは直接の戦闘には従事しない、法の執行官たる官吏を指す——の果たすべき諸々の役割と範囲およびその本質が述べられている。それは政治体（国家）のなかの頭（君主）と四肢（その他の構成員）との相互の関連のなかで述べられているが、この第六卷の記述は中世の騎士の概念——その理念と実際——を知るのに貴重な史料となっていることを特に指摘しておきたい。⁽⁹¹⁾ホイジンガがつとに注目していたように、ジョン自身が「まさに軍事的性格ともいうべき封建的特徴を身につけた独特の聖職者のタイプ」であり、その彼が本書を捧げたトマス・ベケットがまた「騎士的聖職者」⁽⁹²⁾であったことを思うと、この第六卷で詳細に論じられてい

る政治体における武装した手としての戦士の議論はジョンの政治思想の本質的側面を構成していることに気づかされることになる。

以上のように、『ポリクラティクス』第四巻から第六巻においては、まず君主とは何か、君主はどのような存在でなければならぬか、という議論からはじまって、その君主を頭とする国家の全体構造の議論が人体との対比のもとでなされている。したがって、ジョンの政治思想の最も核心的部分が論じられているのはこの第四巻—第六巻の箇所ということになるが、とは言えもちろんここでのみ、政治プロパーの議論が独占的、排他的に展開されているというわけではない。たとえば、有名な暴君殺害論が集中的に語られているのは君主と暴君との相違の議論がなされている第四巻ではなく、予期に反して最終巻の第八巻である。⁽⁹³⁾

最後の第二部（第七巻—第八巻）においては、まず第七巻でいくつかの哲学学派や哲学者、たとえばソクラテス、プラトン、アリストテレス、ピタゴラス、ヒポクリテスといった人々からストア派やエピクロス派、アカデメイア派といった古代の主だった学派の教説が論じられている。そしてそのなかで人間にとっての最高善とは何かが議論され、その結果、時代の病根——ジョンによれば、それは当時の宮廷社会のありように集中的に現れている——がその最高善の認識に完全に失敗したエピクロス派の誤謬から大いに派生しているという結論が導き出されている。ジョンにとって、このエピクロス派の誤謬とは人間の生の至福を悲しみと苦悩からの自由と定義した創始者エピクロスの精神を曲解し、それを現世的な感覚的快楽に求めたところにある。すなわち、富、名誉、権力、栄光、快楽という現世的な幸福価値はみな、最高善を望みながらそれを獲得するために間違った道に陥ったエピクロス派の掲げる生活目標にほかならない。

このようなエピクロスのリストはポエティウスの『哲学の慰め』第三巻で展開されている内容に沿って

いる。リーベシュッツは『ポリクラティクス』第七巻および第八巻と『哲学の慰め』第三巻との内容と構成上の対応関係を詳細に分析し、明らかにしている。⁽⁹⁴⁾たとえば、「以上によって、人間の幸福の諸形態がほぼあなたの目の前に並べられたわけです。すなわち財産と栄達と権力と名誉と快楽です。エピクロスはこうしたものだけを考察して、当然のことながら、快楽を最高の善としました。」(De Consolatione Philosophiae, III, pros. II.)と「哲学の貴婦人」がボエティウスに語る言葉は、「エピクロスとそのすべての追隨者の群れは幸福な生活が悲しみや不安など毛ほどの余地もないような快楽でつねに一杯になっていることだ、と主張する。それはまったく転倒した定義である。だがそこから、彼に追隨する多くの者たちは物質的な喜びへの墮落し、そうした喜びを追及することで自分たちが最高に幸福だと想像してしまっている。」(Polier, V, 15.)というジョンの言葉と呼応するものである。

ジョンはこれらのエピクロス派の生活目標リストに貪欲、野心、虚栄、嫉妬という項目を追加したが、彼によれば、宮廷社会において、国家の行政にさまざまな形で参与している人間たちはおしなべてみなこうしたエピクロスの誤謬の虜になっている「寄生虫」のような存在であるとされる。宮廷人の愚行を扱った第三巻で彼らの本質を「追従」(adulatio)と規定していたジョンは再び第八巻で彼らの追従ぶりをローマのテレンティウスの喜劇『宦官』(Eunuchus, BC, 166)の登場人物トラーソとグナートの依存関係を引用しつつ、取り上げている。そして食道楽に象徴される快楽に関する長い議論を経てこの第八巻の最後の数章は政治問題への言及に立ち戻る。すなわち、ここでもまたエピクロスの誤謬のもう一つの現れである暴君の問題が論じられる。ジョンにとって暴君はたんに世俗政治の領域に見られるだけではなく、聖職者の世界においてもひとしく見られる。それは正しい道から逸脱した悪しき精神にほかならない。

VI 範例集としての『ポリクラティクス』と八君主の鑑Vの伝統

『ポリクラティクス』の著しい特徴の一つが、夥しいほど多くの教訓的な範例に満ちみちた書物であるということとは既に触れた通りである。このことは言うまでもないことだが、この書が基本的に君主や廷臣たちにそのあるべき理想の姿を指し示すことを目的として書かれたいわゆる八君主の鑑Vと呼ばれる文学ジャンルに属する作品であることと密接不可分の関係にある。一例を示してみよう。第五卷第七章はさながら八君主の鑑Vのモデルのような箇所であるが、それはこんな具合に書かれている。

「かつてアレクサンドロスは冬季の遠征中、暖をとりながら、兵隊たちの行進を視察し始めた。寒さのあまり意識不明となっている一人の兵士がいるのを見て、アレクサンドロスはその兵士を自分の傍らに座らせ、こう言ったという。『お前がペルシア人の間に生まれていたとしたら、王の椅子に座るなどということは重罪に相当することだ。だが、それはマケドニアに生まれた者の特権なのだ。』同じようなことが、もう一つの話でこの王について語られている。隣国の王の許婚であった世にも稀な美女が捕虜の一団のなかにいるという報告がアレクサンドロスのもとに伝えられたとき、彼は最高度の慎み、(abstinentia summa)を保って、彼女に一瞥もくれず、直ちにその許婚のもとに送り返した。そしてこの仁慈、(beneficium)のゆえに、彼はあらゆる民族の心をとらえた。かくてその人間性、(humanitas)のゆえに、彼は家臣たちの心をかちとり、その正義、(iustitia)のゆえに、外国の人々の心さえとらえたのである。⁹⁵⁾」

ここで歴史上の模範とすべき支配者としてマケドニアのアレクサンドロスの例が取り上げられ、なにゆえに彼が

それに値する人物なのか、が語られている。見ての通り、それは「最高度の慎み」や「仁慈」、「人間性」や「正義」という特性 (*virtus*) を示し得たがゆえに、アレクサンドロスは立派な支配者に値するのだという評価につながっている。そうした徳性をもって統治の任にあたった歴史上の支配者の実例を模範とすべき教訓として指し示すことによって現実の君主や支配者層に影響を与えようとする意図が明白に窺えるが、ジョンは一体、こういう範例となる例話をどこから仕入れたのだろうか。実を言えば、それはジョンの豊かな古典の教養がどのような実際の史料に基づいているのか、というジョン評価にとつて決して小さくはない問題とも重なるのであるが、ジョンはその古典の知識の多くを原典から直接得ているわけではないことが今日ではよく知られている。すなわち、彼は古代の支配者や有徳の人士に関する数多くの情報や挿話を実際には、スエトニウスの『皇帝伝』や、同じく帝政ローマ期に修辞学の実践書としてフロンティヌスやウァレリウス・マクシムス、ウエゲティウス、ゲリウスらによって編まれていた『戦略論』(*strategemata*) などを通して得ていたのである。⁽⁹⁶⁾そしてそれはともかくとして、ウェッブの注釈からわかることだが、右に見た引用文のなかに登場するアレクサンドロスの挿話は明らかにフロンティヌスの『戦略論』に掲載されていた範例の引用である。そしてその引用は「……この仁慈のゆえに、彼はあらゆる民族の心をとらえた。」の箇所までであり、「かくてその人間性のゆえに、……」以下はジョンの追加なのである。それに引き続き文章をいまま少し引用して見よう。

「スキピオ・アフリカーヌスがスペインでこれと同じことをおこなったのを我々は読むことができる。ある貴族の処女が彼の前に連れてこられた。彼女はその美貌ですべての男たちの眼を引き付けていた。スキピオはアリキウスという名の許婚のもとへ彼女を送り返しただけでなく、彼女の両親が、彼女を取り戻すために持ってきた金銭を夫への持参金として、あるいは寡婦産として与えた。この二重の宏(度)量(*magnificentia*)のゆえに、全民族が

ローマ帝国の人民のもとに服することになった。おそらく、それ以外の道はなかったであろう⁽⁹⁸⁾」

第五巻第七章はこの他にファリスキ人の町を包囲攻撃していた際にカミルスが示した公正さと仁慈の徳、忘恩のローマ人たちのことを少しも意に介さず、ガリア人の侵入から彼らを護ったその度量など、あわせて五つの教訓逸話がフロンティヌスの『戦略論』から借用されている。そしてさらに、同じ『戦略論』なる表題をもつプルタルコスの書物から自制心や克己心、節制などいやしくも支配者ならば当然にもたねばならぬ心得を説く都合十三の例話が語られている。ところで、ジョンの語るアレクサンドロスの例話にもうすこし拘りたいのだが、第三巻第十四章では次のような話が述べられている。

「アレクサンドロス以上にギリシアにおいて有名で偉大な人物は一体、誰であろうか。……我々は彼に捕らえられた海賊が彼に向かって率直で本当の答えを返した話を読むことができる。アレクサンドロスがどういう了見で海を荒らし回っているのか、と尋ねたとき、その海賊はこう答えたという。『お前が陸地でやっているのと同じことだ。俺はたった一艘の船でやるから海賊と言われるが、お前は大艦隊を率いてやるから皇帝と呼ばれるだけの話だ。』と。もし人々がディオニデスの言うことに頷いたとするなら、ディオニデスは皇帝ということになるであろう。道理の問題として両者の間に何らの相違もない。略奪することにおいてより容赦なく、正義を無視することにおいてより軽蔑に値し、法を無視することにおいてより鉄面皮な彼のほうがより悪いということを除いては⁽⁹⁹⁾」

ここでは海を荒らす海賊の悪口に対してさえ怒りに流されることなく耳を傾けることのできるアレクサンドロスの度量の大きさが評価されているのだが、同時にこの章でジョンはまたアレクサンドロスの欠点をも忘れずに指摘し、彼が「父親（フィリップス）」にその徳と悪徳の双方において優⁽¹⁰⁰⁾つてゐる」とも述べている。だが問題はいま見えてきた彼と海賊との問答の例話である。この挿話は元来キケロの『国家について』⁽¹⁰¹⁾（*De Re Publica*）のなかで語ら

れ、おそらくそれに基づいてアウグスティヌスが『神の国』(De civitate Dei)⁽¹⁰⁾において取り上げたことで有名になった話なのであるが、アレクサンドロスに対する「海賊」はキケロの場合にはただ“*inquit*” (彼は答えた) という表現で示され、アウグスティヌスの場合にも“*pirata respondit*” (海賊は答えた) という言葉で語られているにすぎない。ディオニデス (Deonides) という固有名詞は両方の原典にも出ておらず、それがジョンの創案になることは明らかである。ここにもまた古典の引用の際にその正確さを欠くというよりもむしろ、そこに彼なりのある新たな評価を付加したり、場合によってはそれに改変を加えることも辞さないジョンの顕著な特徴が浮かび上がるのを私たちは眼にすることができ。だがそこで注目されねばならないのは、フロンティヌスの『戦略論』に出ているアレクサンドロスのいくつかの挿話を讀んだジョンがそれを自書『ポリクラティクス』のなかに挿入しようとした際に彼ははっきりと自分自身の視点、つまり彼があるべき理想の支配者の姿として思い描くその評価の視点を明確に打ち出しつつ、そうしたという事実である。そしてそのことをジョンは『ポリクラティクス』の「プロローグ」のなかで明言していたのである。

「私は直面する課題にそれらが寄与するところがあり、応えるところがある限りは、それらの適当な材料をさまざまな著者から、ときにはその著者の名前を明記することなく、用いることで問題に対処しようと思しました。それは一つには貴兄 (トマス・ベケット) が学芸に秀でておいでで大部分は既にそれらの著者たちに精通されておられると思われるからであります。そしていま一つはそれらに無知な者たちに読書への愛を吹き込みたいと願うからであります。もし事実とするとこちらから相当程度掛け離れた点があるとしても、貴兄はお海容くださるものと存じます。と言いますのも、ここで書かれていることがすべて本当のことだなどとお約束する積もりはなく、私としてはそれらが真実であれ虚偽であれ、読者にとって有用であるという点を重要視しているからであります」⁽¹¹⁾

このようにして、『ポリクラティクス』はジョンの考える理想の支配者のあり方を読者に提示する、豊富な例話や情報の満載された一巻の範例集という性格をもっている。右に引用したのはわずかにアレクサンドロスとスキピオ、カミルスという古代の三人の支配者の例にすぎないが、そこにも十分にジョンの評価の基準が打ち出されてあるのを私たちは見ることが出来る。すなわち、ジョンにとって、彼らがあるべき支配者の姿を示していると思われるのは彼らが強権によって人民に臨んだからではなく、「仁慈」や「人間性」、「正義」や「度量」、「節制」といった優れた「徳性」を人民に發揮したがゆえである。言い換えれば、そうした徳性をもって人民に接することのできる者だけが真に支配者の名に値するのであって、人民はそのような支配者の人格の高潔性にうたれてこそ、その支配者のもとに進んで服するものだ、というのである。

『ポリクラティクス』において、ジョンが君主やその側近の官僚（廷臣）たちにつよく要請するのはまさにこういう「徳の統治」にはかならない。そこには統治の内実を真に規定するものは支配者の操る統治技術の巧拙ではなく、ひたすらその支配者に内在する人格の高さ、如何であるとする思想がある。ジョンはそうした徳の統治の勧めを古代の先例を持ち出して縦横に展開している。彼がそのような先例を君主や支配者層が絶えず心に留め置くべき「範例」として提示する場合の典拠——前述のように、直接原典からではなかったが——はまことに広範なものである。その多くは聖書、ことに旧約の「申命記」や「列王記」などであり、またアウグスティヌスやヒエロニムスなど主にラテン教父の文献そしてキケロやセネカをはじめとする古代異教の思想家たち——プラトン、アリストテレスのギリシア哲学者も含まれる——の歴史書や哲学書、伝記など過去の書物であるが、ジョン自身が教皇庁や王の宮廷で経験し、見聞した現実世界のなかからも時にその範例が示される。

このように繰り返しになるが、『ポリクラティクス』という書物の最大の特徴の一つは間違いない、そこに埋め尽

くされた「範例」の多さである。ただもちろん、クルティウスもつとに指摘しているように、⁽¹⁰⁾書物のなかに「範例」を使用することは古代から続いている伝統であり、そもそもこの「範例」(exempla)という言葉自体がアリストテレス以来の古代修辞学の術語——ギリシア語では *paradeigma*——であって、「典拠として挿入された物語」を意味することはよく知られている。そしてそれはキケロやクインティリアヌスらローマの著作家たちによっていっそう精緻な理論化をほどこされ、中世に引き渡されてひろく人々の教化・啓発に役立つための文学と教育上の方法となっていたのであった。したがってその意味から言えば、『ポリクラティクス』に「範例」が多用されているとしても、その事実自体は特段に驚くほどのことではないかもしれない。だがそれにもかかわらず、この書における「範例」の多用ぶりがけっして尋常一様のもではなく、多くの章がその範例に満たされている事実はやはり重く受けとめられねばならない。ニードマンが指摘していることであるが、⁽¹⁰⁾『ポリクラティクス』における「範例」の多用は明白にジョンの意識的、自覚的な「方法」なのである。つまり、近代の歴史学の観点から見れば、ジョンの「範例」への依存ぶりがどんなに現実の歴史に対するアクチュアルな感性を欠いているように見えようと、彼にとっては政治と行政の要路にある支配者や宮廷官僚たちにあるべき統治の姿を「範例」という方法で指し示すことはけっしてたんなる観念の遊戯ではなかった。それは『福音書』のイエスの言葉と同様に、具体的な物語を通して普遍的な教訓を示すことであった。すなわち、「ジョンの『範例』が意味するのは、それを読む者が一方における抽象的道德的言説と、もう一方における自分自身の置かれた現実の条件との間にある溝に橋渡しをするのを手助けすることだったのである。⁽¹⁰⁾」

そしてまさにこの点において、『ポリクラティクス』が西欧中世に典型的な(君主の鑑)の代表的作品であることが改めて想起されることになる。言うまでもなく、「君主の鑑」はあるべき理想の君主像を描くことによって現実の

支配者の「教育」を意図するものであるが、その種の政治教育書の歴史は古く、ギリシアではイソクラテスの『ニコクレスに与う』やクセノフォンの『キュロスの教育』、『ヒエロン』をはじめとし、ローマではキケロの『国家論』、『法律論』、『義務について』のなかの議論、あるいはセネカの『寛容について』といった作品が挙げられる。

だが通常はアウグスティヌスの『神の国』第五卷第二四章における「キリスト教皇帝のあるべき姿」についての一節からはじまるとされる。そしてそれは皇帝教皇主義に立つ東ローマ（ビザンティン）からの独立を図り、西ローマがカトリック教会と世俗国家の提携によって新しい中世世界への離陸していくカロリングの文芸復興期において成立することになる。スマラグドゥスの『王道』、オルレアンのヨナスの『王の教育について』、セドゥリウス・スコトゥスの『キリスト教君主論』、ランスのヒンクマルスの『君主の人格と君主の職務について』といった一連の作品がそれであるが、そこで著者たちの教養は聖書や教父の文献だけでなく、異教の古典作品にまで及んでいる。そのような「君主の鑑」の系譜に関しては、別の機会に取り上げたのでこれ以上述べるつもりはないが、十二世紀に『ポリクラティクス』が登場するのは、間違いなくこういう流れを受けてのことだったのである。

Ⅶ むすびにかえて——ジョンの政治思想理解への基本視角

ソールズベリーのジョンの政治思想を『ポリクラティクス』のうちに探ろうとする場合、この書が内容と形式の双方において基本的に〈君主の鑑〉の伝統を踏襲して書かれているという事実はやはり軽視するわけにはいかないであろう。明白にジョンはヘンリ二世統治下のイングランドの政治状況に対する批判を、君主や宮廷官僚層への訓戒——すなわち、あるべき理想の統治者の姿を彼らの前に「鑑」に写し出してみせる——としておこなったのであ

る。したがって、多くの学者たちが『ポリクラティクス』を中世の代表的な君主鑑と位置づけてきたのは極めて当然のことと言わねばならない。

だが同時にこれまで見てきたように、この作品はその内部にさまざまな主題(トポス)を含ませているという事実を忘れるわけにはいかない。少なくとも政治思想に直接関係する主題に限定してみても例えば、人体との対比で論じられている「国家有機体論」、中世の政治理論のメイン・テーマたる「教会と国家」の問題やその枠組みから派生する「教権制理論」、あるいは有名な「暴君殺害論」、ローマ法と教会法の知識からなる「法と正義に関する理論」などなど、そこには無視し得ない問題が扱われている。この意味からも、『ポリクラティクス』が十二世紀の思想の百科全書と言われるのは、けっして大仰な評価ではない。

ところで、かつてディキンスンは「政治思想の発展における『ポリクラティクス』の位置」(一九二七年)と題された論稿の冒頭で次のように述べていた。少しく長くなるが、引用してみよう。「ソールズベリのジョンの『ポリクラティクス』は中世の政治的著作のなかで最も初期に書かれた精緻な作品である。一一五九年に完成されたが、その日付は二つの理由でこの作品を政治思想の歴史における境界標にしている。すなわち、それは西欧思想がアリストテレスの『政治学』に接することになる以前に書かれた唯一の政治論文である。そのためそれは古典古代から新たに借用された観念の影響を受けていない、純粹に中世的な伝統を代表している。それは初期中世の諸制度と関連し、教父の文献から途切れることなく発展してきた教義体系の頂点であり、最も成熟した形態である。第二には、それは十二世紀の末から十三世紀のはじめにかけて起きた制度上の発展における重要な転回点、つまりそれ以前の多くの不明瞭な関係に法的厳密さが持ち込まれ、封建的独立性が政治的支配の明瞭な機関へと統合整理されるようになる発展が生じる転回点の直前に著されたものである。したがって、それはまさに消えなるとする観点から論じ

ているものであるが、しかしそれがより新しい影響物の登場にかかわらず、少なくとも十六世紀の中葉に至るまで政治思想の主流であった思想の遺産であったがゆえに、それを理解することがますます重要な観点から論じているのである。¹⁰⁸

ディキンソンがここで挙げている二つの理由のうち、少なくとも最初のそれのある部分に関しては、今日の中世政治思想史研究の水準を考えると、もはやそのままの形で了解するというわけにはいかなくなっていく。『ポリクラティクス』がアリストテレスの『政治学』の再発見以前の最重要論文であるとする評価は当然のこととして、問題はそれが「古典古代から新たに借用された観念の影響を受けていない、純粹に中世的な伝統を代表している」とする点に関してははっきりとした修正が必要であろう。

というのも、ことは単にジョン研究の問題にとどまらず、ひろく中世政治思想全般に係わるのであるが、従来の中世政治思想史の通説では、中世で政治や国家に関する自立的観念が生じるのはひとえに十三世紀のアリストテレスの『政治学』の導入と受容以後のこととされてきて、ディキンソンの見解もこの点では通説の影響下にあると思われるからである。こうした考え方の根底には、十三世紀以前の思想活動はおしなべて未成熟であるとする予断が働いていると言つてよからう。そして事実、評価に足る中世政治思想と言えば、アリストテレスの受容を、アウグスティヌスに代表されるそれまでの伝統的なキリスト教教義と背馳することなく巧妙におこなったトマス・アクィナスの思想的営為にその本格的な出発点を見るのがこれまでの大方の研究者たちのほぼ一致した見解だったのである。

こうした見解の背後にあるのは、中世の政治思想を近代的な政治観念との距離においてのみ捉えようとする態度であろう。そこからは中世に固有の思惟様式や観念をそれそのものとして検討しようとする姿勢や視点は当然のこ

とに出て来にくい。その意味において、十二世紀のソールズベリーのジョンの研究は重要な意義をもっている。そして既存のジョン研究を批判的に撰取しつつ、十三世紀のアリストテレス流入のインパクト以前の十二世紀に既に別個のアリストテレスの受容の事実——すなわち、ケケロやセネカ、ラクタンティウスやマクロビウス、ボエティウスといった仲介的伝達者によってアリストテレスの「オルガノン」が紹介されており、その道徳哲学の重要部分が西欧で十分に利用できた——があり、それに基づいてジョンをはじめとする十二世紀の知識人たちが彼ら独自の学問体系のなかに「政治の領域」をはっきりと承認していたことを明らかにする仕事を精力的に推し進めているケアリ・ニーダーマンの近年の一連の研究は大いに注目に値する。⁽¹⁰⁾

いずれにせよ、こうしたことを考慮にいと、十二世紀の代表的な人文主義者ジョンの『ポリクラテイクス』の読解にあたってはまずもって従来定説とされてきた思考の枠組みからできるだけ自由になるのが大切であろう。くだいようだが、この書物には実にさまざまなトポスが潜んでおり、その背後には大きく十二世紀の古典復興（ルネサンス）の鼓動が脈打っている。青春の最も多感な十二年間をいわゆるシャルトル学派の学風のなかで過ごしたジョンにとっては、この学派の古典研究やその自然学から派生する一種独特の宇宙論的世界観や政治社会観、あるいは学問や知識への考え方は文字通り彼の血肉をなしていた。したがって、ジョンの政治思想を知ることのできる名著『ポリクラテイクス』の解説は基本的にこのような十二世紀の知的背景への理解を抜きにしては不可能であることは言うまでもない。その点を指摘しつつ、ここではひとまず『ポリクラテイクス』という書物を通してジョンの政治思想を理解するための助走をおこなったにすぎない。

注

- (1) R. L. Poole, *Illustrations of the History of Medieval Thought in the Departments of Theology and Ecclesiastical Politics*, London, 1884, p.218.
- (2) Janet Coleman, "John of Salisbury", in David Miller (ed.), *The Blackwell Encyclopaedia of Political Thought*, 1987, p.256.
- (3) 厳密に言えば、『ポリクラティクス』はまず「エンテティクス」(Enthetics)と称する詩と全体に対する「プロローグ」からはじまり、第一巻を除く各巻に付された「プロローグ」を計算からははずすと、全八巻(Liber)全一六六章(Caput)となる。
- (4) この点は研究者たちがこぞって指摘してきたところであるが、「索引」のよく整備されたウエップの校訂注釈書(後注6)が公刊されるにいたって、索引が活用できるようになると、ジョンの引用した著作および著作家の膨大なリストが一目瞭然となった。田中峰雄の計算によれば、『ポリクラティクス』での引用著作家総数は二五一名、引用文献数は五一八冊におよぶ(新旧聖書を含まず)。「ヨアンネス・サレスメリエンシスの学芸観」(『史林』第五八巻第五号、一九七五年、八〇頁注②)の「知の運動——十二世紀ルネサンスから大学へ」シネルヴァ書房、一九九五年に収録)ブルックはこの点に関して、次のように言っている。「ウエップ版の『ポリクラティクス』のなかに引用された著者の索引がその著作のいかなるものにもまして明白にソールズベリーのジョンの精神をよく表している。それは百科全書的な学問とカトリック的嗜好を示している。それはどんな中世の大図書館よりも豊かな蔵書量を誇る記憶のカタログである。」(C. N. L. Brooke, "Introduction", in W. J. Miller, H. E. Butler and C. N. L. Brooke(eds.), *The Letters of John of Salisbury*, vol. I, *The Early Letters* (1153—1161), Oxford, 1986 (f. p.1955, London), p. xliii.
- (5) R. L. Poole, "John", in *The Dictionary of National Biography*, vol. K—X, 1908—1913, p.882.
- (6) *Policraticus*, III, 5, *レキヌメナ* C. C. J. Webb (ed.), *Iouannes Saresburiensis Policraticus, sive de nugis curiarum et vestigijs Philosophorum VIII*, 2 vols, Oxford, 1909.
- (7) R. W. Southern, *Medieval Humanism and Other Studies*, Basil Blackwell, 1970, pp.30—31.

- (8) 拙稿「ノールズベリリのジョンの〈人文主義〉の意味」〔獨協法学〕第四三号、一九九六年。
- (9) 拙稿「巨人の肩の上に乗る矮人」——ノールズベリリのジョンの思想世界」〔法学研究〕第七〇巻第二号、一九九七年。
- (10) 『メタロギコン』のなかでジョンの伝えるシャルトルのベルナルドゥスの言葉。前掲、拙稿「巨人の肩の上に乗る矮人」——ノールズベリリのジョンの思想世界」一一一頁。
- (11) C. H. Haskins, *The Renaissance of the Twelfth Century*, 1927, p.100. 〔十二世紀ルネサンス〕野口洋二訳、創文社、一九八五年、八五頁。別宮貞徳・朝倉文市訳、みすず書房、一九八九年、七八頁。〕
- (12) C. H. Haskins, *op. cit.*, p.100. 〔前掲、野口訳、八五—八六頁。別宮・朝倉訳、七八頁。〕
- (13) J. Huizinga, "Een Praegothieka geest: Johannes van Salisbury", in *De taak der cultuurschiedenis*. 〔ホイジंगा「ロミッタ精神の人」ノールズベリリのジョン」(里見元一郎訳『文化史の課題』東海大学出版会、一九六五年)、一三三頁。のち『ホイジंगा選集4ルネサンスとリアリズム』河出書房新社、一九七一年に収録〕
- (14) J. Huizinga, *op. cit.* 〔前掲、里見訳、一一九頁。〕
- (15) J. Huizinga, *op. cit.* 〔前掲、里見訳、一三五頁。〕
- (16) Hans Liebeschütz, *Medieval Humanism in the Life and Writings of John of Salisbury*, The Warburg Institute, University of London, 1950, p. 39. 〔トンス・リーベシュッツ、柴田平三郎訳『ノールズベリリのジョン 中世人文主義の世界』平凡社、一九九四年、八一頁。〕
- (17) C. C. J. Webb (ed.), *op. cit.*
- (18) John Dickinson (trans.), *The Statesman's Book of John of Salisbury*, New York, 1963 (f. p.1927).
- (19) Joseph Pike (trans.), *Friolities of Courtiers and Footprints of Philosophers*, New York, 1972 (f. p.1938).
- (20) Murray F. Markland (trans.), *John of Salisbury Policraticus The Statesman's Book*, New York, 1979.
- (21) Cary Nederman (ed. and trans.), *Policraticus*, Cambridge University Press, 1990.
- (22) 例えば、これらのうち最も早い段階で公刊されたディキンソンの翻訳は『ポリクラテイクス』の「政治的」な箇所を抽出して一巻としたもので、その残余の「非政治的」な箇所をカバーしたのがバイクの翻訳であるが、この点に関して K・

- L・ホーハンはこう指摘している。『ポリクラティクス』が二つに分かれてしまったこと(ディキンソンの翻訳と、バイクの翻訳)は結果において、ソールズベリーのジョンの政治思想の理解にとってかなりな影響をもつにいたっている。例えば、彼の『暴君殺害論』に関して実に多様な解釈が存在する。ディキンソンの翻訳——そのなかで暴君殺害の議論がこの著作のさまざまな文脈から根だけ引き抜かれて、『政治的箇所』として一括して集められている——はこうした多様性をいっそう増長させてしまった。これらの各章がその各々の文脈から切り離されたこと……はこれらの章のもっている力と意図を交差させ、歪めて伝えることになった。ひとつは暴君や暴君殺害に関するさまざまな議論が異なった文脈で繰り返されるようになる、そこに一つの『暴君殺害論』があるのではなく、いくつかの暴君の議論があることになり、政治的アクターの見いだされる状況の相違にわたってその焦点がさまざまに変化することは明らかである。『ポリクラティクス』の最も広範に利用しうる英語版に見られるこの基本的な欠陥は、政治学の分野——そこでは古典語の知識が崩壊しつつある——でのソールズベリーのジョンの思想の歪曲を引き起こしてしまっている。かくて、その細部の内容のまことに豊かな側面にもかかわらず、『ポリクラティクス』は全体として現代の政治理論の研究者にとってはしばしば無用なものとなっている。」
- Kate Langdon Foran, "A Twelfth-Century "Bureaucrat" and the Life of the Mind: The Political Thought of John of Salisbury", *Proceedings of the PML Conference*, vol. 10, 1985, p. 65.
- (23) John Dickinson, "Introduction: The Place of the Policraticus in the Development of Political Thought", in idem (trans.), *The Statesman's Book of John of Salisbury*, op. cit., pp. xvii-lxxxii.
- (24) Cary Nederman, "Editor's introduction", in idem (ed. and trans.), *Policraticus*, op. cit., p. xv.
- (25) Joseph Pike, "Preface", in idem (trans.), *Frivolities of Courtiers and Footprints of Philosophers*, op. cit., p. ix.
- (26) C. N. L. Brooke, "Introduction", in W. J. Miller, H. E. Butler and C. N. L. Brooke (eds.), *The Letters of John of Salisbury*, vol. 1, op. cit., pp. xlii-xlii.
- (27) E. R. Curtius, *Europäisch Literatur und lateinisches Mittelalter*, 1954. [『ヨーロッパ文学とロマン中世』南大路振一・岸本通夫・中村善也訳、みすず書房、一九七一年、一一一—一一二頁。]
- (28) Charles Brucker, "Introduction", in Denis Foulechat, *Le Policraticus of Jean de Salisbury*, Geneva, 1995, pp. 14-15. J. Huizinga, op. cit. [前掲「里見訳」一一二頁。]など、『メタロギコン』の題名については「前掲」拙稿「巨人の

- 肩の上に乗る矮人〉——ソールズベリーのジョンの思想世界」一〇九頁。
- (29) R. L. Poole, *Illustration of the History of Medieval Thought*, op. cit., p. 217 and n. 18. その根拠として、ポールは「シャルンマウナート (Carl Scharschmidt, Johannes Sarsbertensis nach Leben und Studien, *Schriften und Philologie*, Leipzig, 1862.) の示唆によるものとしてゐる。彼の言はこうである。「シャルンシュット博士の示唆するところ (一四五頁) によれば、ジョンは *Policratus* というギリシア語の名前を知っており、それを *folks* から派生するものと考えた。ここからジョンは疑いもなく *town* という言葉の意味にひっかけながらその題名を作った。」
- (30) C. C. J. Webb, *John of Salisbury*, New York, 1932 (r. p. 1971), p. 22.
- (31) W. A. Dunning, *A History of Political Theories Ancient and Mediaeval*, The Macmillan Company, 1902, p. 185 and n. 2.
- (32) 前掲の W. A. Dunning の邦訳では、訳者は『政治家読本』という訳語を用いている (ダンニング、古賀鶴松訳『政治学説史 第一巻』人文閣、一九四二年、二三〇頁)。念のために言えば、ソールズベリーのジョンの政治思想や『ポリクラテイクス』に関する本格的な研究は我が国においてはまだ数人の研究者によってなされているにすぎないし、中世政治思想を概観する日本人の手になる著作にいたっては、後述する大西藤米治の書を除き、いまだ一冊も存在しない。したがって、『ポリクラテイクス』に触れたものを、本格的にそれと取り組んだ研究者たちの論稿——ここではほぼ『ポリクラテイクス』という表題で表現されている——を除いた上で、政治思想の通史で中世の部分を簡単に言及した概説書や、欧米の通史の翻訳書などに限って見てみると、本文にあるような例が目につくことになる。参考までに若干の例を挙げておこう。
- 例えば、「政治家論 *Policraticus*」(J・J・レルスキ、斎藤敏訳『西洋政治思想史』理想社、一九六二年、二四一頁。大西藤米治『中世政治思想研究』有斐閣、一九六四年、五九二頁。)。「政治論」(天野和夫「ジョン・オブ・ソールズベリーの抵抗権論」〔立命館法学』第四三巻第三号、一九六二年、二六八頁以下。)。「政治家の書」(M・ペコー、坂口昂吉・鷲見誠一訳『テオクラシー』創文社、一九八五年、一三二頁。)。「ポリクラテイクス」〔政治権力者』(田中治男『西歐政治思想』岩波書店、一九九七年、三〇頁。)など。
- (33) C. C. J. Webb, "prolegomena", in idem (ed.), *Policraticus*, vol. I, op. cit., p. xxviff. idem, *John of Salisbury*, op. cit., p. 22.

- (34) J. Huizinga, *op. cit.* 「前掲」 思想誌「一二二頁」]
- (35) 『ホリシトナキヤトス』なる題名の問題について、Max Kerner, *Johannes von Salisbury und die logische Struktur seines Policraticus*, Wiesbaden, 1977, pp. 101-107. Peter von Moos, *Geschichte als Topik. Das rhetorische Exemplum von der Antike zur Neuzeit und die historiae im "Policraticus"*, Johannes von Salisbury, 1988, pp.556-582.
- (36) *Policraticus*, VI, 1.
- (37) *ibid.*, VIII, 13.
- (38) *ibid.*, VIII, 13.
- (39) Entheticus, V. 1215-1256. キキヌムサ、Ch. Petersen (ed.), *Johannis Saresberienis Entheticus de dogmate philosophorum*, Hamburg, 1843. R. E. Pepin (ed.), "The "Entheticus" of John of Salisbury: A critical Text", *Traditio*, vol. 311, 1975, pp.127-193.
- (40) C. H. Haskins, *op. cit.* 「前掲」 野口訳「別宮・朝倉訳」]
- (41) 周知のように「ノスキニズ以降」「十二世紀ルネサンス」を扱った研究が大いになされてきたことは例え、同名の書物自体がかなり発表やれづらぬことからもわかる。G. Pare, A. Brunet, P. Tremblay, *La Renaissance du XII siècle Les Ecoles et L' Enseignement*, Paris and Ottawa, 1933. C. Brooke, *The Twelfth-Century Renaissance*, London, 1969. C. W. Hollister (ed.), *The Twelfth-Century*, New York, 1969. C. R. Young (ed.), *The Twelfth-Century Renaissance*, Holt, Sinhart & Winston, 1969. Maurice de Gandillac et Edouard Jauneau, *Entretiens sur la Renaissance du 12 siècle*, Paris, 1968. など。この「十二世紀ルネサンス」なる用語の使用はノスキニズ自身を述べているところ、彼の創案ではなく、十九世紀から存在した。よなみに「ノスキニズ以前のモンクラント」は、D. C. Munro, *The Renaissance of the Twelfth Century*, Annual report of the American Historical Association for Year 1906, Washington, 1908. などがあがる。これら「十二世紀ルネサンス」の問題も含めて広く十二世紀文化全体の研究に関して、一九八二年までの文献をフォローしてその研究史と問題点を検討したものと、Stephen C. Ferruolo, "The Twelfth-Century Renaissance", in Warren Treadgold (ed.), *Renaissances Before the Renaissance Cultural revivals of*

Late antiquity and the Middle Ages, Stanford University Press, 1984, pp. 114-143. が有用である。ところで、ハスキンスの力説したラテン語古典の復興にとどまらないギリシア語やアラビア語の古典文献のラテン語へのさかんな翻訳活動についてはちしめたり、Marie-Thérèse d'Alverny, "Translations and Translators", in Robert L. Benson and Giles Constable (eds.), *Renaissance and Renewal in the Twelfth Century*, Harvard University Press, 1982, pp.421-462. においていって言えば、シモンがギリシア語を解さなかったとはいえず、ギリシア語世界にまったく不案内であったわけではもちろんない。例えば、『メタロギコン』で彼はアラビア訪問の際、ラテン語に精通するあるギリシア人翻訳者と知り合ひ、ギリシアの学問について教えを受けたことを記している。(Met. I, 15) が、このエピソードを Marie-Thérèse d'Alverny 論文は重要視している。p.427. また邦語文献では、伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス 西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波書店、一九九三年。

- (42) Jacques Le Goff, *Les intellectuels au moyen âge*, Paris 1957. [柏木英彦・三上朝造訳『中世の知識人』岩波新書、一九七七年、二三—二四頁。]

- (43) ちなみに、ベルナルドゥス・シルウエストリスの『大宇宙と小宇宙』(*Megacosmos et microcosmos*) はまた『世界全体について』(*De mundi universitate*) という題と併記されて十九世紀後半に公刊されたが、その後、古写本に基づいて『宇宙形状誌』(*Cosmographia*) という表題で英訳が出された。Winthrop Weherbee (trans.), *The Cosmographia of Bernardus Silvestris*, New York, 1973. これを機に、この表題が定着しつつあるようである。Cf. Peter Donke (ed.), *Bernard Silvestris, Cosmographia*, Leiden, 1978. この作品の詳細については、柏木英彦『中世の春』創文社、一九七六年に収められた、「自然の発見——ベルナルドゥス・シルウエストリス」を参照のこと。

- (44) Seneca, *Ep.* 1 xxxii. 3 (L. C. L., II, 242).

- (45) トゥールーズ攻囲に触れた言葉はこうである。「イングランドの輝かしき王、ブリテンの最大の王たるヘンリ二世はガロンス付近にあって、貴兄(シケット)の助言と指揮を受けて獅子吼している。トゥールーズを効果的に包囲しつつ、ローヌ河とアルプスに至るまでのプロヴァンスの人々を脅えさせているだけでなく、要塞を破壊し人々を屈服させスペイン大公とフランス人たちを震え上がらせてもいる。あたかも彼一人で全世界を脅威に陥れているかのように。」*Policraticus*, VIII, 25.

- (46) 第八巻は「暴君殺害」を正当化した第三巻（第一五章）の議論を修正し否定する議論が組織的になされている巻であるが、その第八巻の第二三章の末尾近くでジョンはローマ教会の主君（Dominus Adrianus）たるハドリアヌス四世のローマ教皇としての謙虚な態度を称賛し、ハドリアヌスが「まだ存命中に」（*Dum superes*）、彼の言に耳を傾け、彼の経験に学ぶべきだ、と述べている。 *Policraticus*, VIII, 23.
- (47) 一一五九年秋に完成された『ポリクラティクス』はウィリアム・ブリト（ジョンの友人でカンタベリの副修道院長）の手元にしぼし置かれていたが、間もなくセルのペトルスのもとに送られた。カンタベリ・サークルの一員ブリトに関しては、『エンテティクス』（*vv. 1667-1672; 1679-1682*）で称賛しながら（この点に関して、その交友関係を中心にジョンの精神の軌跡を追った、平田耀子『ソールズベリーのジョンとその周辺』白桃書房、一九九六年、一四、一九—二〇頁参照）も、ジョンはブリトがスケッチを十分にサポートしていないという不満を常々抱いていたようである。それはともかく、ペトルス宛の書簡にジョンはこう書いている。「私は宮廷人の愚行と哲学者の足跡に関して一冊の書物を公にしました。それは貴兄の評価次第で私を喜ばせもし、失望させもすることでしょう。その書物は推敲を重ねたものではありませんので、貴兄ら友人たちに修正をお願いしたいのです。イングランド王の輝かしい尚書部長官のもとへ急いで送りたいと思っているのですが、差し支えなければ、貴兄も是非お手元に置いて検討してくださいますように。と申しますのも、それはまことに口やかましい書物で、ただ一人の友人も宮廷では得られないような代物なのです。けれども私は自分を廷臣たちの敵の一人にさせたくはないのです。どうかすぐにもお目通しをお願い致します。そして叱責いただければ、ただちに貴兄を待ち受けている私のところに送り返していただきたく存じます。ゆめゆめブリトの（ときカンタベリのあの窃盗のもとには返送されませんように。）」 *Letter III*, in *The Letters of John of Salisbury*, vol. 1, *op. cit.*, p.181.
- (48) *Metalogicon*, W, 42.
- (49) R. L. Poole, "The Early Correspondence of John of Salisbury", *Proceedings of the British Academy*, vol. xi, 1924, p. 10 ff. C. C. J. Webb, *John of Salisbury*, *op. cit.*, p.19. Hans Liebeschütz, *op. cit.*, p.13. [前掲「柴田訳」三一頁。]
- (50) Giles Constable, "The Alleged Disgrace of John of Salisbury in 1159", *English Historical Review*, vol. LXix, 1954, pp.67-76.
- (51) *Letter 19*, in *The Letters of John of Salisbury*, vol. 1, *op. cit.*, p.31.

- (52) 「私の父であり、主君であるカンタベリの大司教テオバルドゥスは深刻な病の床にある。快方に向かうのか、もっと悪くなるのか、皆目わからない。彼はもはや以前のように職務を全うすることができないので、私にこの重い責任を委ねている。私の肩に彼は教会の仕事を監督するという背負い切れない重荷を背負わせた。」(*Metalogicon*, W. 42)とジョンは述べている。これは『メタロギコン』での発言であるから一一五九年当時のことであろうことになるが、テオバルドゥスが病に倒れた一一五五年以降ずっとジョンはカンタベリの大司教座でテオバルドゥスの職務を事実上、代行していた。なお、これらジョンの一連の活動を彼がカンタベリの大司教のもとに奉職した時期(一一四七年ないし四八年)からヘンリ王の不興を買った時期(一一五六年)まで彼の『初期書簡集』(*The Letters of John of Salisbury*, vol. 1, *op. cit.*)のうちに丹念に追ったものとして、甚野尚志「ソールズベリのジョンと教会政治活動——伝記的事実の復原——」(『比較文化研究』第三一輯、一九九三年、二四七—二八八頁)を参照。
- (53) *Letter* 19, p.32.
- (54) ジョンは王への執り成しの依頼をベケットの秘書ヘルムルフに (*Letter* 27, p. 44)「そしてベケットに直接おこなっていい」(*Letter* 28, p. 45.)
- (55) Giles Constable, *op. cit.*, p. 67ff. R. W. Southern, "Pope Adrian V", in *Medieval Humanism and Other Studies*, *op. cit.*, p.244 ff. 前掲、甚野「二七〇頁—二七一頁」。
- (56) ジョンは『メタロギコン』のなかでこの問題についての自らの関与をこう明らかにしている。「[教皇ハドリアヌスは]私の願いで、(Ad preces meas)、卓越したイングランド王ヘンリ二世に、アイルランドを世襲の権利で所有するものとして授与した。そのことは現在でも、その証書から明らかである。すべての島々は、コンスタンティヌスが行なった寄進に基づく古い権利によってローマ教会に属するものだが、[教皇は]私を通じて、(per me)、最高のエメラルドで飾られた金の指輪を送り、それによってアイルランドを所有する権利の叙任がなされたのである。」(前掲、甚野論文中の甚野訳「二七〇頁」による) *Metalogicon*, W. 42.
- (57) 教皇ハドリアヌス四世(教皇在位一一五四—一一五九年)はジョンと同国人のニコラス・ブレイクスピア。初のイングランド人教皇であった。ジョンとこの教皇との関係の親しきは『メタロギコン』(W. 42)や『ポリクテティクス』(W. 24)、『書簡』(書簡番号一五、一八、五〇、五一、五二)などを通してよく知ることができる。

- (58) Letter 30, p.48.
- (59) Letter 31, p.50.
- (60) C. H. Haskins, *op. cit.* pp.57-58. [前掲] 野口訳、四九頁。別宮・朝倉訳、四四頁。]
- (61) *Politraticus*, V, 10.
- (62) 前掲 拙稿「巨人の肩の上に乗る矮人」——ソールズベリーのジョンの思想世界」。
- (63) 前掲 拙稿「巨人の肩の上に乗る矮人」——ソールズベリーのジョンの思想世界」。
- (64) *Metalogicon*, IV, 42.
- (65) David Knowles, "Archbishop Thomas Becket: a Character Study", in *idem*, *The Historian and Character*, Cambridge University Press, 1963, p.106. Richard Barber, *Henry Plantagenet*, London, 1964, p.83. W. L. Warren, *Henry II*, London, 1973, p.56. 以下で余計なことを一言しておきたい。一一五四年、カンタベリー大司教テオバルドゥスが自分の配下のベケットを助祭長兼務のままイングランド王国の尚書部長官に推薦し、それを国王ヘンリ二世が受け入れたということは何を意味するのであろうか。一見するところ、両者の関係はここでは良好に見える。ステューヴン王時代の内乱を経て、王位継承を果たした新たな政治秩序を確立しようとするヘンリ二世にとって、大司教テオバルドゥスはある意味で大恩人であった。というのも、彼はステューヴン王に逆らって教皇エウゲニウス三世の召集したランス公会議に出席し、イングランド王の破門を阻止する一方で、イングランド王国に対するアンジュー家の王位継承権を承認させてヘンリの王位の確立に大きな貢献をしたからである。だが彼は同時にグレゴリウス改革の流れを受けて「教会の自由」をイングランド王国のなかで貫こうとする教会人であった。トマスを助祭長兼務のまま国王側近の尚書部長官に推薦したのは、あくまでもトマスを自己の陣営のうちに留め置いて教会の利益を保持しようとしたことにあるのである。一方、後年（一一六二年）同じくヘンリもまた尚書部長官のトマスをその職のままテオバルドゥス死後のカンタベリー大司教に指名する。しかしこのときにはベケットは大司教には就くが、長官は辞任している。このことはベケットが自分を通じてイングランドの教会を王国の統治下に置こうとする国王ヘンリの意図に逆らい、「教会の自由」のために教会の側に完全に立ったことを意味する。以後、国王ヘンリと大司教ベケットの対立は決定的となり、その対立はトマスのフランス亡命とその帰還のち一一七〇年の暮れも押し詰まった日（十二月二九日）カンタベリー大聖堂において国王の四人の騎士によって暗殺されるこ

とで終わりを告げることになる。この間、テオバルドゥスに引き続いてベケットの秘書として終始、大司教を補佐し続け、大陸への亡命も共にしただけでなく、ベケット暗殺の現場にさえ立ち会っていたジョンはこれらの一連の出来事をどのように見ていたのだろうか。それは言い換えれば政治と宗教、国家と教会の関係という中世政治思想上の最も中心的問題に通底することであるが、この問題にジョンは究極のところどのような考えを抱くことになったのだろうか。しばしば言われてきたことはジョンはその経歴から見ても「教権主義者」だとする説であるが、ここではこの問題に触れることはできない。それよりも、いま改めて確認しておきたいのは当面の課題である『ポリクラティクス』の書かれた時期(一一五九年)が言うまでもなくベケットがまだヘンリ二世の尚書部長官のときのことだったという点である。この時期カンタベリの大司教テオバルドゥスは存命中ではあったが、既に長らく病床に伏しており、大司教秘書としてのジョンはその主君に代わって事実上その職務を代行していた。そしてその位置から見えたイングランドの宮廷政治のあり方を、それに深く関与する教会の高位聖職者たちへの忌憚のない告発とともに、ジョンは鋭く批判し、その是正のために「宮廷人の愚行と哲学者の足跡」を公にするのである。その猷呈の相手である尚書部長官ベケットに対してはもちろんのこと、その主君ヘンリ二世に対してもジョンは一定の信頼をこの時期においてはいまだ保持していたと思われる。したがって、『ポリクラティクス』のうちに示されたジョンの政治思想を探ろうとする場合、まずは一一五九年という時点においてその書を捉えるべきであり、時間的にその書の成立以後に起きた「クランendon法」(一一六四年)中の聖職者特権をめぐる所謂ベケット論争とベケット暗殺という歴史的事実に徒に目を奪われて、それを無条件に『ポリクラティクス』に逆照射させてはいけないと思う。なお、ヘンリ二世とトマス・ベケットの対立を頂点とする十二世紀イングランドの国制史に関してはそれなりの長い研究史がある。ここではさしあたり、ベケットという人物の評価とベケット論争に焦点をあてるが、そのために七〇年以前の成果を知るには、J. Alexander, "The Becket Controversy in Recent Historiography", *Journal of British Studies*, vol. IX, 1970, pp. 1-26, が便利である。あわせて欧米の研究の交通整理の上に明晰な分析を示している邦語文献を挙げておく。佐藤伊久男「カンタベリ大司教トマス・ベケットの戦い——12世紀の国制と教会の側面」(『西洋史研究』新第一三号、一九八四年、一一二五頁)。同「中世中期イングランドの『教会』と王権——転換期としての12世紀——」(佐藤伊久男・松本宣郎編『歴史における宗教と国家』南窓社、一九九〇年、二九一—三三三頁)。渡辺愛子「ベケット論争研究の動向——教会法からみた聖職者特権を中心に——」(『西洋史学報』復刊七号、一九八〇年、二七—三六頁)。同

「ソールズベリーのジョンの書簡集にみるベケット論争の一面」（橋口倫介編『西洋中世のキリスト教と社会』刀水書房、一九八三年、一四七—一六〇頁）。

- (66) *Policraticus*, prologus.
- (67) *ibid.*, prologus.
- (68) トマス・スケットとジョンとの関係について比較的最近の文献としては、A. Duggan, "John of Salisbury and Thomas Becket," in Michael Wilks (ed.), *The World of John of Salisbury*, Oxford, 1984, pp.427-438. 平田耀十「ソールズベリーのジョンとトマス・スケット」および「John of a Salisbury and Thomas Becket: the Making of a Martyr」（いずれも同氏の前掲書、三九—五九頁、pp.121-133.）
- (69) *Policraticus*, prologus.
- (70) *ibid.*, VI, prologus.
- (71) *ibid.*, VI, prologus.
- (72) Hans Liebeschütz, *op. cit.*, p.18. 「前掲」柴田訳、四一—四二頁。】
- (73) 念のために言うが、ジョンが『ポリクラティクス』のなかでボエティウスの『哲学の慰め』を引用するのはなにもこの箇所（VI, prologus）が最初ではない。ウエップの校訂注釈書の「索引」にも留意しつつ、全巻を見てみると、第二卷（II, 12）に既に引用されており、その意味から言えば、この箇所ボエティウスの名も『哲学の慰め』という書名についてもなら明示的に表現されていないとしても、それだけをもってジョンがとくにボエティウスの存在を意識的に伏せているという解釈にはつながらないかもしれない。しかしながら、この第七卷の「プロローグ」の箇所に関して、ウエップの注釈書にもボエティウスへの言及がまったくなされていないことは暗示的である。
- (74) 「最後のローマ人にして最初のスカラー学者」（Martin Grabmann, *Geschichte der scholastischen Methode* 1, Nachdruck, 1957, p. 148.）と言われ、「アンブロシウス、アウグスティヌス、ヒエロニムと並んで中世の建設者の一人」（E. K. Rand, *Foundations of the Middle Ages*, New York, 1957 (f. p. 1928.）に位置づけられるボエティウスの人と作品については、ここで改めて詳述する必要があるまい。その『イサゴゲー注解』のなかで述べられた「プラトンとアリストテレスの全著作をラテン語訳するという彼の壮大な計画については一体、どこまでなされたのかは、今日不明である。

- しかし、残存するアリストテレスの論理学書の翻訳と注解(「オルガン」の一部)によって、少なくとも十三世紀以前の西欧中世はアリストテレスを知り得ていたことがわかる。ボエティウスの著作は十九世紀中葉のシーニュ版以来、全著作の校閲が完成してゐる。J. P. Migne (ed.), *Boetius Opera Omnia, Patrologia Latina*, LXIII-LXIV, 1847. 最近の研究動向を知るには、Calvin M. Bower, "Boetius, Anicius Manlius Severinus", in *Dictionary of The Middle Ages*, vol. 2, Charles Scribner's Sons, New York, 1983, pp.291-293. またシモン・ド・ボエティウスの関係について、Gillian Evans, "John of Salisbury and Boethius on Arithmetic", in *Machael Wilks* (ed.), *op. cit.*, pp. 161-167. 邦語文献では管見する限り、坂口みづ「ボエティウス——中世スコラ神学の先駆者——」(片野達郎編『総合研究 中世の文化』角川書店、一九八八年、三一七—三三七頁。)がきわめて刺激的である。
- (75) *De consolazione Philosophiae*, in Boethius, *Tractates, De consolazione Philosophiae*, eds. and trans. H. F. Stewart, E. K. Rand and S. J. Tester, The Loeb Classical Library, 1973 (f. p. 1918). [ボエティウスの「渡辺義雄訳『哲学の慰め』筑摩書房、一九六九年。島中尚志訳、岩波文庫あり]
- (76) *ibid.*, I, 4, p.154. [前掲「渡辺訳」二四頁。]
- (77) *ibid.*, I, 4, p.146. [前掲「渡辺訳」一九—二〇頁。]
- (78) *ibid.*, I, 4, p. pp.148-150. [前掲「渡辺訳」二〇頁。]
- (79) *ibid.*, I, 4, p.152. [前掲「渡辺訳」二三頁。]
- (80) *ibid.*, I, 2, p.138. [前掲「渡辺訳」一三頁。]
- (81) *Policraticus*, VII, prologus.
- (82) C. C. J. Webb (ed.), *op. cit.*
- (83) C. C. J. Webb, *op. cit.* (1992), p.25. なお、ウエブはこうして「最初の五巻が前者の主題に」最後の四巻が後者の主題に相当する」と述べてゐるが、これは「最後の三巻……」の間違ひであらう。
- (84) R. L. Poole, *op. cit.* (1884), pp.217-218.
- (85) Hans Liebeschütz, *op. cit.* p.23 ff. [前掲「柴田訳」五一頁以下。]
- (86) John Dickinson (trans.), *op. cit.*

- (87) 国家を人体との対比で説明する箇所は第五卷第二章であるが、ただしそこには「足」の部分に相当する「職人」——「農民」ではなく——に関する記述はない。それは第六卷二〇章でなされている。
- (88) Hans Liebeschütz, *op. cit.* p. 23ff. [前掲] 柴田訳、五二頁以下。]
- (89) *ibid.*, pp. 24-25. [前掲] 柴田訳、五三頁。] *idem*, "John of Salisbury and Pseudoplatarch", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. IV, 1943, pp. 33-39.
- (90) これらの問題に関して邦語論文では、甚野尚志「ソールズベリーのジョンと『トラヤヌスへの教え』」(「歴史と地理」第四六〇号、一九九四年、一一—一四頁。)が欧米の論文を紹介しつつ大変に詳細で整理の行き届いた分析をおこなっている。ここではあきらめ以下のものでだけを挙げておく。いずれも Michael Wilks (ed.), *The World of John of Salisbury*, *op. cit.* に入っている。 Janet Martin, "John of Salisbury as classical scholar", pp. 170-201. Max Kerner, "Randbemerkungen zur *Institutio Traiani*", pp. 203-206. Tilman Struve, "The importance of the organism in the political theory of John of Salisbury", pp. 303-317.
- (91) 上の点に関する「J. Flori, "La Chevalerie selon Jean de Salisbury", *Revue d'Histoire Ecclesiastique*, Tom LXXXVII, 1982. Johanna Maria var Winter, *Ritterschap: ideaal en werkelijkheid*, 1976. [J・M・フロン・ファン・ヤンター、佐藤牧夫・渡辺治雄訳『騎士』東京書籍、一九八二年、一〇一頁以下。] Joachim Bünke, *Höfische Kultur Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter*, München, 1986. [ヨフキム・ブムケ、平尾信三・和泉雅人・相澤隆・斎藤太郎・三瓶慎一・一條麻美子訳『中世の騎士文化』白水社、一九九五年。]
- (92) J. Huizinga, *op. cit.* [前掲] 里見訳、一二五—一二六頁。]
- (93) 上の点に言えは、暴君殺害を明確に正当化している議論は既に第四巻の前の、第三巻第一五章でおこなわれている。
- (94) Hans Liebeschütz, *op. cit.*, p. 29 ff. [前掲] 柴田訳、六二頁以下。]
- (95) *Policraticus*, V, 7.
- (96) Hans Liebeschütz, *op. cit.*, p. 67 ff. [前掲] 柴田訳、一三三頁以下。] Janet Martin, "John of Salisbury's Manuscripts of Frontinus and of Gellius", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. XL, 1977, pp. 1-26. *idem*, "Uses of Tradition: Gellius, Petronius, and John of Salisbury", *Vivator*, vol. x, 1979, pp. 57-76.

- (65) C. C. J. Webb (ed.), *op. cit.*, vol. I, pp.309-310.
- (66) *Policraticus*, V, 7.
- (67) *ibid.*, III, 14.
- (68) *ibid.*, III, 14.
- (69) *De Re Publica*, in Cicero, *De Re Publica: De Legibus*, trans. C. W. Keyes, (The Loeb Classical Library), 1970 (f. p. 1928), III, xiv, 24, p.202.
- (70) *De civitate Dei contra paganos*, N, 4, in *Œuvres de Saint Augustin* (Bibliothèque Augustinienne) Paris, Desclée, de Brouwer 1959, 93. *La cité de Dieu* I-V, p.540. なお、アウグスティヌスの引用するこのアレクサンドロス大王と海賊の挿話については、拙書『アウグスティヌスの政治思想』未来社、一九八五年、二九四頁以下を参照されたい。
- (71) *Policraticus*, prologus.
- (72) E. R. Curtius, *op. cit.* [前掲] 南大路・岸本・中村訳「七四―七八頁」
- (73) Gary Nederman, "Editor's introduction", *op. cit.*, p. xxi-xxii.
- (74) Gary Nederman, *op. cit.*, p. xxii. なお、ジョンにおける「範例」の意味については、Peter von Moos, "The use of exempla in the *Policraticus* of John of Salisbury", in Michael Wilks (ed.), *op. cit.*, pp.207-261. idem, *Geschichte als Topik: Das rhetorische Exemplum von der Antike zur Neuzeit und die historische im "Policraticus" Johannes von Salisbury*, *op. cit.*, p.141ff.が詳細な考察を加えている。併せて、前注(96)のシャネット・マーティンの論稿も参照のこと。ついでながら、ジョンにとって、そもそも現実から遊離し、現実とのレリヴァンスを欠いた思想(学芸)など意味をなさないと考えられていたことは『メタロギコン』において明らかである。例えば、そのなかのつぎのような言葉からも、そのことはある程度推察されよう。当時、彼の周囲の知の世界にあっては、弁証論のみが突出してはやされていたが、ジョンはそういう跋行的な知のあり方をこう批判している。「昨今の人々がやっているように、弁証論だけがもてはやされ、それだけが一人歩きして、それ以外には関心が払われず、その深さや秘奥のみあれこれと詮索されるだけで、家政 (*domus*) にも軍隊 (*militia*) にも商売 (*forum*) にも宗教 (*claustra*) にも、政治 (*curia*) にも教会 (*ecclesia*) にもなら有効ではないような諸問題に自己限定して、ただ学校 (*scola*) においてのみ評価されているようであるならば、それ

- （弁証論）など無意味である。だいたい学校とか若い時代というのは、大概のことがある限界内でゆるされるからだ。」
(*Metalogicon*, II, 9.)
- (107) 拙稿「君主の鑑」(一)〜(八)〔獨協法学〕第二五号・一九八七年第三七号・一九九三年。継続中)
- (108) John Dickinson, "Introduction: The Place of the Policraticus in the Development of Political Thought", in idem (trans.), *op. cit.*, pp. xvii-xviii
- (109) Cary Nederman, "Aristotelianism and the Origins of "Political Science" in the Twelfth Century", *Journal of The History of Ideas*, vol. LII, no. 2, 1991, pp. 179-194. ニーダーマンの他の論稿については「こゝでは一々列挙しない。以下の、この問題に関連する拙稿のそれぞれの(注)を参照されたい。『ソールズベリーのジョンの『ポリクラティクス』』(「君主の鑑」8)〔獨協法学〕第三七号、一九九三年)。「ソールズベリーのジョンとアリストテレス——政治的徳性(virtus)をめぐって——」(「法学研究」第六七卷第二二号、一九九四年)。「ソールズベリーのジョンとキケロ——理性と言語、社会の起源をめぐって——」(「獨協法学」第四四号、一九九七年)。